

常磐松文庫蔵『棠陰比事』（朝鮮版） 三卷一冊

長 島 弘 明

はじめに

宋の桂萬榮の著である『棠陰比事』は、中国の断獄物の中で最も著名なものの一つである。宋・元・明・清の各時代を通じて広く読まれ、また我が国においても、近世初期以来、数種の和刻本・翻訳書・注釈書が刊行されており、西鶴の『本朝桜陰比事』以下、小説の中にも、その影響を受けた作品が少なからず存在する。

本学常磐松文庫所蔵の一本（藤原惺窩・富岡鉄斎等旧蔵本）は、元の田澤校訂本を翻印した朝鮮活字印本であるが、後述のように和刻諸本のもとなつた興味あるものであり、『富岡文庫善本書影』（大阪府立図書館編、昭和十一年）によつてその存在は知られながらも、『棠陰比事』の諸版研究においてさえ原本の検討がなされることのなかつた（朝鮮版〔あるいは元版〕については、林羅山の書写本か和刻本に拠つてゐた）稀覯本である。

『棠陰比事』については、既に瀧川政次郎氏「棠陰比事の研究」（『法律史話』所収、昭和七年）、波多野太郎氏「棠陰比事の諸本について」（目次の題は「棠陰比事源流攷」、『横浜大学論叢』第二卷第三号、昭和二十五年十月）、朝倉治彦氏「未刊仮名草子集と研究（二）」の『棠陰比事物語』の解題（昭和四十一年）等の諸論考があるが、以下、これらの研究を参考とし、多少の補訂を施しつつ、『棠陰比事』の成立や諸本、また常磐松文庫本の書誌・性格について解説を加え、あわせて常磐松文庫本の全文を翻刻する。

## 一 『棠陰比事』の成立

著者の桂萬榮については、全祖望の「石坡書院記」(『慈谿縣志』所引)にその伝が記されるが、『大明一統志』卷第四十六、(宋版)『棠陰比事』に付された張慮の識語(嘉定四年(一二二二))、また萬榮自身の序(同年)を加えて概略を記せば、彼は浙江省慈谿縣の人、字を夢協といい、慶元二年(一二九六)進士に及第し、開禧三年(一二〇七)、餘于県の県尉となる。嘉定元年(一二〇八)建康司理、同八年主管戸部架閣、同九年には大学輪対となつて武学博士を授けられた。また平江の通判、南康の太守に任じ、さらに直秘閣尚書右郎となる。端平元年(一二三四)に萬榮自身が記した『棠陰比事』重刊の際の識語には、「朝散大夫新除直寶章閣知常德府」とある。致仕後、東山の麓に石坡書院を営み、九十六歳の高齡で歿したという。著書には、『棠陰比事』の他、『石坡書義』五卷、『論語精義』十卷、また『石坡奏議』がある。人望厚く、民衆に任地での留任を望まれたり、歿後、祠を建てて祀られたと伝えらる。また、道光二十九年(一八四八)に宋版を覆刻した朱緒曾の序によれば、萬榮の子孫は、元・明の世まで、代々進士を出したともいう。

萬榮が『棠陰比事』の編述を終えたのは、序の記された「重光協洽」(辛未)、即ち嘉定四年(一二二二)であつたらう。この種の断獄物の書としては、早く漢代に董仲舒の『決事比』があつたことが、宋の王欽若の『崇文総目』によつて知られるが、萬榮が直接取材したのは、自序に記すように、和凝・和嶮父子の『疑獄集』、及びそれを増補した鄭克の『折獄龜鑑』からである。『棠陰比事』は、右の二書の文章を改め、各話の配列や標題の形式に意を用いたものに他ならない。これらの書は、時に「断獄物語」「裁判小説」と呼ばれることがあるが、編者達の意図からすれば、「物語」「小説」ではなく、実際にあつた名裁判・名判決を著録することによつて、これまた実際に刑獄に携わる者の参考に供したものであらう。

『疑獄集』『折獄龜鑑』について略述する。『疑獄集』は、五代の宰相和凝(後周の顯徳二年(九五五)歿、『周書』列伝・『新五代史』雜伝にその略伝が載る)が著名な裁判の話を集めておいたものを、子の和嶮(序、及び『直齋書録解題』)によつて水部郎・太子中允等を歴任したことがわかるのみ)が増補したもの。宋代の景光武『郡齋讀書志』・陳振孫『直齋書録解題』・馬端臨『文獻通考』・王欽若『崇文総目』等によれば、上中下の三卷(上卷は和凝、中・下巻が和嶮の編)・六十七条より成るといふが、現存本の明の嘉靖十四年(一五三五)の李崧祥刊行本(内閣文庫に林羅山手校の写本あり)や、それを清の咸豊元年(一八五一)に翻印した金鳳清等の刊行本(静嘉堂文庫蔵)によれば、四卷(卷一・二が和凝の、卷三・四が和嶮の編)・百条に増加し、かつさらに明の張景が、『折獄龜鑑』『棠

陰比事』及び明の吳訥の『棠陰比事』補編より採った六卷百八十二条を『補疑獄集』として付し、十卷本の体裁をとっている(『四庫全書総目提要』に載るのはこの本)。羅山手校の李崧祥刊行本の写しによってその概略を示せば、巻頭に嘉靖乙未(十四年)の李崧祥の「疑獄集序」、次に和嶸の「疑獄集序」、次に至元十六年(一二七九)の杜震の「疑獄集序」、次に「疑獄集目錄」があり、本文に入っている。

一方、『折獄龜鑑』は、宋の鄭克(元の劉壘の『隱居通義』、また「呂成公方元恪墓誌」〔朱緒曾の『重刊棠陰比事』跋所引〕等に僅かに伝が載る)が『疑獄集』を増補・補訂し、自身の論評を付したもので、『宋史』『直齋書錄解題』によれば、もと三巻本であったらしいが、『四庫全書総目提要』は八巻とする(『文獻通考』で二十巻とするのは、二十門に分つことを誤ったことである)。八巻本は、『守山閣叢書』『明弁齋叢書』等に所収の他、光緒四年(一八七八)刊本、同八年刊本等があり、また『說郛』『龍威秘書』等には抄録がある。『守山閣叢書』所収本(永樂大典本、『四庫全書』に収められたもの)によって大体を示せば、最初に『四庫全書総目提要』の解題の引用があり、次に虞應龍の「原序」、次に本文、末尾に錢熙祚の「折獄龜鑑跋」を付す。本文は二十門(釋冤上・釋冤下・辨誣・鞠情・議罪・懲惡・察姦・覈姦・擿姦・察慝・證慝・鈎慝・察盜・迹盜・譎盜・察賊・迹賊・譎賊・嚴明・矜謹)、二百七十六條、三百九十五事である。

『棠陰比事』は、右の二書に取材して百四十四話を選び、文章に手を加え、さらに唐の李瀚の『蒙求』に倣って類似の話を二話ずつ組み合わせ、四字句の韻語を用いて、記憶に便ならしめている。『疑獄集』『折獄龜鑑』によって、話末に出典を示したものもあり、「鄭克(評)曰」の形で『折獄龜鑑』の鄭克の評語を付した話もある(元の田澤校訂本ではこの評語を付す話が増加し、明の呉納校訂本は逆にこれを削除する)。

書名について言えば、「棠陰」は、『史記』燕召公世家や『風俗通義』巻一に出る召公姬奭の故事による。即ち、召公が村々を巡回した時、農民を煩わすことのないようにと郷亭に宿らず、棠樹の陰に野宿してその訴えを聴いたという故事である。その徳を慕って人々が詠じたという詩は、「甘棠」と題して『詩經』召南に収まる。また、「比事」は、似たものを対比することを言う。直接には、前記のように、類話を二話ずつ対比させる形をとるゆえの称であるが、『漢書』刑法志や陳忠伝等に見える「決事比」(判例がない場合、類似の事案に対しては、相似た法律を類推適用すること)の語も、この命名に影響を与えていると思われる。

## 二 諸版（中国版・朝鮮版）

『棠陰比事』の諸版は、伝本不明の版も多くあることにより、その分類は必ずしも容易ではないが、一応、(1)宋版系統・(2)元版系統・(3)明版系統の三種に大別して概説する。なお、元版系統の流れに立つ和刻諸版については、項を改め後にやや詳しく触れる。

### (1) 宋版系統

宋版の『棠陰比事』は、(少なくとも)二度にわたって出版されたことが、朱緒曾の宋版覆刻本(道光二十九年(一八四九))に収められた萬榮自身の序、及び同じく彼自身の重刊本の識語より判明する。両版とも現存しないために、原本の面影は推測の域にとどまるが、両版は次の如きものであったと想像される。

#### (イ) 嘉定六年版(初版)

「開禧丁卯」で始まる萬榮の序、(執筆は嘉定四年(一二二一)、常磐松文庫本の翻刻参照)、嘉定癸酉(六年)の劉隸の序(朱緒曾本では脱落、『四明叢書』本・『四部叢刊』本に存す)、本文(百四十四話、七十二韻)、嘉定辛未(四年)の張處の識語を収める。両序・識語の順は不明、また目録があつたか否かも不明である。

#### (ロ) 端平元年版(再版)

右に加えて、端平元年(一二三四)の萬榮の重刊に際しての識語を付す。参考のため、朱緒曾本によってその識語の全文を左に記す。

端平改元七月乙卯萬榮以尚書右郎蒙恩陞對首奏守一心之正以謹治原次奏徵羣吏之貪以固邦本天威咫尺滂賜褒嘉既而玉音異發謂朕嘗見卿卿來所編棠陰比事知卿聽訟決能審克萬榮即恭奏臣昨調建康司理右掾待次日久因編此以資見聞豈料天侈其逢誤關乙覽容臣下殿躬謝暨出禁門便有力求此本者鋟梓星江遠莫之致是用重刊流布庶可上廣聖主好生之德下裨涖官哀矜之意十月既望朝散大夫新除直寶章閣知常德府桂萬榮謹識

但し、朱緒曾本には劉隸の序を存していないことは前述したが(朱緒曾が底本とした宋版がこの版か否か不明であるが)、この再版時に削られた可能性もある。目録があつたかどうかは、初版と同じく不明。

右が想像される二種の宋版(ともに一卷か)であるが、宋本系統の現存本には左のものがある。

(イ) 朱緒曾刊行『重刊宋本棠陰比事』(道光二十九年本)

黄丕烈蔵の宋版(再版本、あるいはさらに後の版)の覆刻で、道光二十九年(一八四九)の刊。全二巻一冊。巻初に大字で「棠陰／比事」、その裏に「上元朱氏影宋本／道州何紹基篆檢」とある。以下、朱緒曾の「重刊宋本棠陰比事序」(道光二十九年)、桂萬榮の「棠陰比事序」、同じく萬榮の重刊の識語、「棠陰比事標題」(二行三題)、本文、張處の識語、黄丕烈の識語(嘉慶戊辰(十三年、一八〇八)、余既刻宋本棠陰比事成客問余曰…)で始まる朱緒曾の跋(その後「茗溪沈錫堂撫仿／武林王世貴刻鑄」とある)の順。所見本、静嘉堂文庫蔵本。

(ニ) 朱緒曾刊行『重刊宋本棠陰比事』(別本)

一巻一冊。(イ)本と、内容はもとより、序・識語・跋の順まで全く同じものであるが、末尾に、「余前序於桂夢協事實未及詳考…」で始まる朱緒曾のもう一つの跋(二丁)を追加する(但し、所見本は乱丁本で、この跋の一丁目と二丁目の間に、「余既刻宋本棠陰比事成客問余曰…」の最初の跋が入っている)。刊年等、詳しいことは不明ながら、(イ)本出版後、ほど遠からぬ時期に、版を改めて再刊したものと推定される。

所見本は、東大東洋文化研究所蔵本。

(ホ) 嵩慶刊行『聚珍本棠陰比事』(同治六年本)

朱緒曾本の板木が南京の兵火によって焼けたため、嵩慶が翻印したもの。一巻二冊(一冊目は「蔣棠峴嫗思彥集兒」の題まで。二冊目は、その本文から)。巻初に「棠陰／比事」とあり、その裏に「同治丁卯(六年、一八六七)仲春／木樺山房擺板」とある。張處の識語、桂萬榮の重刊の識語、萬榮の「棠陰比事序」、朱緒曾の「重刊宋本棠陰比事序」、嵩慶の「聚珍本棠陰比事序」(同治六年)、「棠陰比事標題」(二行三題)、本文、黄丕烈の識語、朱緒曾の跋(余既刻宋本…)の方)の順。

所見本、東大総合図書館本。

(ハ) 嵩慶刊行『重刊棠陰比事』(光緒三十年本)

(イ)本を嵩慶自らが光緒三十年(一九〇四)に翻刻したもの。一巻一冊。一丁目裏に「棠陰／比事」と書し、以下、嵩慶の「重刊棠陰比事序」(光緒三十年)、朱緒曾の「重刊宋本棠陰比事原序」、桂萬榮の「棠陰比事序」、黄丕烈の識語、張處の識語、萬榮の重刊の識語、「棠陰比事標題」(二行三題)、本文、朱緒曾の跋(余既刻宋本…)の方)の順。

(イ) 『四明叢書』第三集所収本

嵩慶刊行本(兩の方)を底本として、張壽鏞が『四明叢書』に収めたもの。一卷。民国二十三年(一九三三)の張壽鏞の「序」、『慈谿縣志』本伝の桂萬榮の伝の引用、劉隸の「棠陰比事序」(嘉定癸酉「六年、一二二三」)、朱緒曾の「重刊(宋本)棠陰比事序」、嵩慶の「聚珍本棠陰比事序」、萬榮の「棠陰比事序」、萬榮の「棠陰比事標題」(「二行三題」)、本文、萬榮の重刊の識語(「識」とある)、張慮の識語(同上)、黃丕烈的識語(同上)、朱緒曾の跋(「跋」とある。「余既刻宋本」)の方、張壽鏞の跋(甲戌「民國二十三年」)の順。

(イ) 『四部叢刊』続編所収本

元鈔本(この底本となったものは(2)の元版系統とは異なる。いかなる本か不明だが、明らかに宋本系統である)を模した雙鑑樓(傳增湘)蔵本を底本として、張元濟が刊行したもの。上下二卷。(「公紳破極元膺擒擧」から下卷)。劉隸の序、萬榮の「棠陰比事序」、「棠陰比事目錄」(「二行二題」、本文、萬榮の重刊の識語(「後序」とある)、張慮の識語(「棠陰比事後序」とある)、張元濟の跋の順。校訂を経ているために、朱緒曾本以下の本(イ)と文に小異がある。

(2) 元版系統

元版の原本は未発見であるが、それを恐らく忠実に翻印したと思われる朝鮮活字版が、現在、本学常磐松文庫に存する。常磐松文庫本の詳しい書誌・その性格等については後の別項に譲るが、宋版系統と比較した場合、この元版系統本の顕著な特徴とすべきは、全体を上中下の三卷に分っていること、上欄(匡郭外)に、それぞれの話について「釋冤」「察姦」「覈姦」等の標目(分類)が記されていることであろう。文章も、話によっては、宋版(系統)と少なからぬ異同がある。また、宋版では、出典を注記する話や、『折獄龜鑑』によった鄭克の評語を付す話が僅かであったが、この元版(系統)では、その数が大幅に増加している。

(イ) 至大元年版

前記の如く原本未発見ながら、(ロ)の朝鮮版に存する田澤の序が元の至大元年(一一三〇八)に書かれたものであることから、この年(あるいは、その後のほど遠からぬ時期)に刊行されたものがあるのは確実である。

(ロ) 朝鮮活字版

(イ)本を翻印したもの。三卷一冊。常磐松文庫本が、即ちこの版である。書誌・特徴ともに詳しくは後述。刊行の時期は十七世紀初頭以前であるが、それ以上の特定は、現在の所できない(後述)。因みに、和刻諸版は、この朝鮮活字本を底本としている。また、内閣文庫蔵、林羅山手校のこの朝鮮版の写しの識語(羅山自筆)には、「朝鮮別板」を以て校合した由が見え、この朝鮮別板も、恐らくは元本系統の一本であろうと思われるが、伝本不明であり、一まず確言は避けておく。

(3) 明版系統

明の英宗の正統七年（一四四二）、吳訥（『明史』列伝にその詳伝が載る）が、桂萬榮の選んだ百四十四話のうち、類似の話六十四話を削除して八十話とし、もとの二話ずつの組合わせを解いて、改めて獄の軽重によって先後をつけたもの。出典や鄭克の評語を削り、文章を一部改竄・要約し、また「謹按……」の形で、吳訥自身の按語を入れたところもある。これを原編とし、さらに続編二十三話、補編二十七話を付け加えている。よって刪正本といっても、ほとんど別書の趣きがある。『四庫全書総目提要』に解題するのは、この明版（系統本）である。

(イ) 正統七年版

明版の原本も見るを得ないが、『学海類編』等所収本の補編の序により、正統七年（一四四二）、もしくはその直後に刊されたものが初版と推定される。内容は次の(ロ)参照。

(ロ) 『学海類編』集余二所収本

原編一卷、続編一卷、補編一卷。原編は、桂萬榮の「棠陰比事序」、「棠陰比事原編目録」（一行四題）、本文、萬榮の重刊の識語（「後序」とする）、「按桂氏前序題曰重光協洽是辛未……」で始まる按語、吳訥の跋の順。参考のため、原編八十話の目録を左に掲げる。

漢武明繼 李傑買棺 戴爭異罰 曹駁坐妾 宗元守辜 杜亞疑酒 張昇窺井 歐陽左手 錢推求奴 向相訪賊 程琳挂籠 强  
至油幕 程載仇門 莊遵疑哭 妾吏酖宋 玉素毒郭 呂婦斷腕 從事函首 斐均釋夫 曹攄明婦 崇龜認刀 魏濤證死 張舉  
豬灰 王璩故紙 李公驗擲 王臻辨葛 顧知子盜 孫料兄殺 乖崖察額 胡質集鄰 孔察代盜 朱詰昧民 佐史誣妻 思兢詐  
客 江分表裏 章辨朱墨 南公塞鼻 包牛割舌 蔣常覬嫗 張輅行穴 薛向執賈 楊牧咎巫 郎簡校券 文成括書 御史朱狀  
王珣辨印 方偕主名 至遠憶姓 蘇請附柩 賈廢追服 程簿舊錢 孫甫春粟 孫登比彈 傅令鞭絲 孫亮驗蜜 司空省書 商  
原詐服 竇阻免喪 次武各驅 薛絹互爭 季珪鷄豆 宗裔卷袖 彥超虚盜 道讓詐囚 裴命急吐 柳設榜牒 張鸞搜鞍 濟美  
鈎篋 袁滋鑄金 孫寶秤鐵 崔黯搜帑 楊津獲絹 韋阜劾財 元膺擒輦 劉相鄰證 韓參乳醫 柳寃犴奴 王控狂嫗 虔傲鄧  
賢 考肅杖吏

続編は、「棠陰比事統編目録」を巻頭に置き、本文に入る。目録（二十三話）は次の通り。

于公高門 寒朗悟帝 郭宏傳律 不疑辨獄 盛吉無冤 仇覽成孝 蘇瓊化爭 素立守法 戴胃違詔 有功好生 歐陽無恨 陳  
泊任咎 立節論情以上善可法  
凡十三人

周陽曲法 張湯深文 溫舒展月 元禮鐵籠 俊臣羅織 周興熾甕 吉溫獄網 蔡確煨煉 安惇忤心 萬俟誣忠以上惡可為  
戒凡十人

補編は、巻頭に呉訥の「棠陰比事補編序」(正統七年)があり、次に「棠陰比事補編目錄」、本文の順となっている。目錄(二十七話)は次の通り。

袁安別繫 高桑察色 崔公仁恕 李疇列枉 唐臨不寬 眞卿惑雨 崔褐霽潦 陳襄捫鐘 劉敞察冤 呂陶服罪 濂溪悟酷 張治代盜 海牙釋孝 德輝察冤 田滋得藁 澤民訊僧 清獻原情 承議持平 提舉辯明 陳睦酷報 安禮神明 文原雨旱 師泰折獄 易貴辨紙 彭祥還質 筠守釋誣 梅妻逆天 易貴以下四條俱明朝事

(ハ) 『叢書集成』初編所収本

右(四)の『学海類編』本を底本とする。

(ニ) 陳順烈校注・今譯「棠陰比事選」

呉訥が刪正した原編八十話のうちから五十話、続・補編五十話のうちから二十四話、計七十四話を選び、陳順烈が校注(校訂には『四部叢刊』本等を使用)と、現代中国語訳を添えたもの。附録として、桂萬榮の「棠陰比事序」、同じく萬榮の重刊の識語(「棠陰比事」后序)とある、呉訥の跋、また按語、補編の序を付す。一冊。一九八〇年、群衆出版社刊。

### 三 常磐松文庫本書誌

韓本(朝鮮活字本)。三卷(上中下)一冊。縦三六・四種、横二一・九種の特大本。線装(袋綴)。藍表紙(原表紙か否か不明)。綴糸白(後補)、五針眼訂法(五つ目綴)。外題なし。目錄題、「棠陰比事目錄」(末尾に「棠陰比事目錄終」)。内題、「棠陰比事卷上(中・下)」。尾題、「棠陰比事卷上(中・下終)」。版心は、白口、花口魚尾(上下とも)の中に、「棠陰比事序 一(〜四)」「棠陰比事目錄 一(〜四)」「棠陰比事上 一(〜二十八)」「棠陰比事中 一(〜二十七)」「棠陰比事下 一(〜三十四)」の記載。行数、半葉十行(有界、一行十八字)。匡郭、四周双辺、縦二六・七種、横一七・二種。紙数は、序四丁(田澤序及び桂萬榮序)、目錄四丁、上卷二十八丁、中卷二十七丁、下卷三十四丁、総計九十七丁。蔵書印は、序第一丁表の右上に「冷泉府書」(朱字)、右下に「小汀氏蔵書」「実践女子大學圖書館印」(ともに朱字)、目錄第一丁表右下「尹慶福藏」(朱字)、下巻最終丁裏左中央から左下にかけて「小汀文庫」(朱字)、「百恭之印」(白字)、「桑軒」(朱字)、「常磐松文庫印」(朱字)、裏表紙の内側・中央やや下方に「富岡百鍊」「鍊齋」  
□□「(ともに白字)。

また本書は、内箱(縦三八・三種、横二四・二種、高四・三種)、外箱(縦四一・二種、横二七・三種、高七・九種)によって二重に保護



されているが、内箱の蓋の表の中央に「惺窩先生所藏之本／棠陰比事 朝鮮刻」と直接墨書し、右下には「古桑文庫」（朱字）の印を捺した白地の紙を貼付。また蓋の裏の中央には「鐵崖書院」と直接墨書し、その下には「富岡百鍊」（白字）の印のある白地紙を貼付し、さらに右側には、黄地紙に「古桑文庫」と墨書して下に「百恭之印」（白字）を添えている。外箱の蓋の表には、中央上方に「棠陰比事」の肉筆の題簽（無粋白紙）、右下に「古桑山房圖書記」（朱字）の印を捺した紙片（白地）を貼付。また、蓋の横にも「朝鮮棠陰比事一」（横書）と、朱の双枠の中に肉筆で書かれた紙片（白地）を貼付する。

右の蔵書印等からだけでも、本書が尹慶福・藤原惺窩・富岡鉄斎・小汀利得らの間を伝来してきたことがわかる。本学常磐松文庫に入ったのは、昭和四十七年十二月の三都古典連合会主催の古典籍下見展観大入札会の際であり、同会の目録には、本書の目録第四丁裏本文第一丁表の見開きの写真が載る。因みに、この会には小汀利得の旧蔵書が多数出品された。また前記のように、昭和十一年、大阪府立図書館編の『富岡文庫善本書影』には、本書の本文第一丁表の写真が掲載される。

本書は、版相、極大本の書型、五針眼訂法、花口魚尾等の諸特徴から、朝鮮活字本であることは疑い得ない。しかしながら、刊行の時期については、刊記の類もなく、また序跋類も桂萬榮と田澤のもののみで、手がかりがなく不明である（朝鮮版刊行に際しての序跋類が最初からなかったものかどうか。事故による、あるいは意図的な脱落の可能性も全くないではない）。日本に舶載されたのは、藤原惺窩の蔵書印（「冷泉府書」）があることから、少なくとも近世初期以前（惺窩の死は元和五年（一六一九））である。あるいは、文禄慶長の役の際に、朝鮮から持ち帰られたものでもあろうか。舶載書目の類には、未だその書名を見出し得ない。

『棠陰比事』が本朝に伝来した時代は明瞭ではなく、瀧川政次郎氏のように、鎌倉時代に既に舶載されていた可能性があるとする説もあるが（前掲『法律史話』所収「棠陰比事の研究」、また『裁判史話』等）、確証はなく、いずれも推測の域にとどまる。従って、惺窩旧蔵本たる常磐松文庫本の存在は、『棠陰比事』の本朝渡来についての確実な資料としては、（内閣文庫蔵の羅山手沢の写本の存在とともに）最古のものである。のみならず、本書は、『棠陰比事』現存諸版中、最古のものである可能性もある。

#### 四 常磐松文庫本の特徴（附、朝鮮版と林羅山）

常磐松文庫本（朝鮮本）『棠陰比事』の諸版中における位置、及び性格については、先の「二 諸版」の項で若干ふれるところがあった。以下、改めてやや詳しく検討するが、その前に、元版の校訂者の田澤について一言する。

田澤の詳しい伝は管見に入らないが、『棠陰比事』の序に自ら記すところによれば、居延（甘肅省）の人、大徳癸卯（七年、一三

○三) 蘭豊の推刑になっており、序の最かれた至大元年(一三〇八)には承事郎澧州路総官府の推官の任にあった。『千頃堂書目』によれば、延祐年間(一三一四—二〇)には常德路の推官であり、『洪範洛書辨』(一卷、不伝)の著があったことを付け加えることができる。

さて、元版の翻印本である常磐松文庫本を、先行する宋版(厳密に言えば、朱緒曾の覆宋本)と比較するに次の相違点がある。

田澤が、その序において、「取開封鄭氏評語列之各條之下且復揭其綱要疏其音義而標題於上」と記すところにより、その校訂・加筆の様の大よそを知り得るが、改めて示せば左記の通りである。まず、宋版では全一卷の体裁であったものを、上・中・下の三巻に分っていること。また、宋版では僅かの話の末尾にしか示されなかった出典注記を、『疑獄集』『折獄龜鑑』等により、かなりの数を増補し、さらに、宋版では殆ど採られなかった『折獄龜鑑』の鄭克の評語を、大部分の話末に加えている。難語には注文双行で音義を注し、また『折獄龜鑑』等に倣って、各話につき、匡郭外上欄に、「釋冤」「察姦」等々の標題(分類)を示している(『折獄龜鑑』に見えぬ新たな標題「標目」に、「宥過」「覈姦(奸)」「遊俠」がある)。百四十四話の順は、宋版と同じ。文章は、人・時代を詳しくし、描写を具体的にするなど、宋版にやや手を入れた条もあり、また殆ど全文、旧のままの話もある。全体として、さほど極端な改変はなされていない。参考のため、宋版の第一話の前半部を次に示す(諸版分類の(1)の(ア)・(イ)・(ロ)・(ハ)本のいずれも同一本文であるが、一応(ハ)本に拠り翻字する)。ここは宋版と元版(系統)の文章がやや相違する箇所であるが、後の常磐松文庫本の該部分と対照して、文章の改変の實際を知られたい。

丞相向敏中判西京時、有僧過村舍、求宿。主人不許。求寢於門外。夜半忽見有賊携一婦人并物踰牆者。僧恐明日爲主人所執、因亡去。走荒草中、誤墜。智井而踰牆婦人已爲人殺在其中。既而主人蹤迹捕獲、送官不勝拷掠。遂自誣服。但云贓與刀留在井旁。不知何人持去。獄成、公獨以贓仗不獲疑之。詰問數四。僧云前生負此人命。無可言者。力問之。乃以實對。於是密遣吏訪賊(下略)

一言で言えば、元版系統(朝鮮版『棠陰比事』)は、宋版の古態をある程度まで残しつつ、より読者の理解を容易ならしめるような改訂がなされているわけである。

中国においては、清末以降の一種の『棠陰比事』再刊ブームの折にも、底本として選ばれたのは、宋版ついで明版であり、元版は顧られることはなかったが(再刊の際に、元版の伝本が容易に見付からなかったという物理的要因も考える必要があろう)、わが国の『棠陰比事』受容史上における元版系統(朝鮮版)の意義は、中国におけるそれと、いささか趣を異にする。というのは、わが国における『棠陰比事』関係の書(即ち、和刻本・加點本(厳密に言えば訓訳本)・翻訳本(『棠陰比事物語』等)・注釈書(『棠陰比事諺解』『棠陰比事加鈔』等)の全てが、この元版系統(朝鮮版)の流れに立つものであるからに他ならない。

朝鮮版(元版系統)とわが国の『棠陰比事』関係書との関係を考える時に、逸することができないのは林羅山の存在である。内閣文庫蔵羅山手沢本『棠陰比事』(二冊)は、この朝鮮版の写しに他ならない。卷末にある羅山の自筆識語を左に掲げる。

右棠陰比事上中下以朝鮮板本而写焉因依寿昌玄琢生白玄東金祇景順子元之求之而口誦之使侍側者點朱墨矣 吾邦吏曹之職廢久矣余於是乎不能無感欽恤之誠且又以朝鮮別板處々一枝焉雖然他日宜再訂正目筆削而可也此點本即傳写于四人之家云

元和己未十一月二十七日 羅浮山人誌回

『羅山先生文集』卷五十四の「棠陰比事跋」は、右文中の「史曹之職」を「刑曹之職」に改めてこれを採録したものである。右の識語によれば、羅山が朝鮮板を底本として書写したものを、野間玄琢・菅玄東・金子祇景らの求めによって口誦し、側の者をして加点(難語の訓を含む)させ、また朝鮮別板を以て校合したという。この内閣文庫本を検討するに、序・目錄・本文の内容はもとより、字配り・行移りまで常磐松文庫本に一致し(但し、下巻には乱丁があり、序三丁裏のみは不注意で改行が一字ずつずれているが、次丁ではそれを補正している)、常磐松文庫本と同版の『棠陰比事』を忠実に書写した本であることが判明する。というより、常磐松文庫本が、前述の如く藤原惺窩の旧蔵本であり、羅山と惺窩の関係を考える時(惺窩が、所蔵の稀觀本を羅山にしばしば貸与した事は、『惺窩先生文集』等によって知られる)、羅山書写本の底本となったものが、この常磐松文庫本そのものであった可能性も少なくはない。羅山識語が記されたのは元和五年十一月二十七日、惺窩はこの年の九月に既に死去しているわけであるが、識語の年月日は、門人への口誦と加点・校合の完了の時日を示すのであろうから、惺窩生前に底本が貸与され、書写が済んでいたと考えても少しも無理はない。なお、識語中の「朝鮮別板」については、現在のところ未詳である。

羅山が口誦しつつ加点させたという訓点は、朱と墨の二種がある。講義が二度にわたったと考うべきであらうか。のちの『棠陰比事』整版本(関吉右衛門版、風月宗智版)や『棠陰比事加鈔』など、訓点(難語の訓を含む)を有する諸書は、殆どこの羅山の訓みに従っているといつてよい(「釋<sup>トシユエ</sup>寛<sup>ニヤウ</sup>」<sup>トシユエニヤウ</sup>「奸誘<sup>コウソウ</sup>」<sup>トシユエニヤウ</sup>「本文第一表」)などの語の特徴的な訓を比較されたい。さらに後の山本北山校訂本は、羅山の訓とやや異なる所もあるか)。

羅山識語の記された元和五年の時点では、当然ながら、和刻本・加点本(訓訳本)ともに出刊されていなかったと想像されるが(朝鮮版を底本としている和刻本・加点本が既に出版されていたならば、羅山がわざわざ朝鮮版を書写、あるいは口授するには及ばない)、『棠陰比事』もしくはそれと同類の書に対する羅山の関心は相当なものがあつたとおぼしく、内閣文庫には、『疑獄集』(写本一冊)、『祥刑要覽』(写本一冊)、『洗冤録』(刊本)等々の、彼の手校もしくは旧蔵本が存する。

また、羅山には『棠陰比事諺解』なる注釈書がある。所見本は、東大総合図書館蔵(南葵文庫旧蔵)の三卷(上中下)三冊の写本

(刊行はされなかったらしい)であるが、各巻頭に「夕顔巷(羅山の別号)諺解」とあり、冒頭の「棠陰比事綱要」で「釋寃」「察姦」等々の標目について解説した後、各話の注解に入っている(序・目録はない)。各話は、まず漢字・カタカナ交りの翻訳を掲げ(訳文を検討するに、底本は明らかに朝鮮版「元版系統」である)、二字下げて「釋寃」等のいずれの標目に当てはまるかを示し(標目を示さない話もある)、注解を加えている。鄭克の評語は直接翻訳されてはいないが、注解部に評語の要旨が取りこまれ、生かされている。その後さらに、登場人物の伝記等を各史(『宋史』『北史』等々)から引用している所もある。また、時として『疑獄集』『無冤録』等の同類の書を引き、また「楊津獲網」の条で、田澤が津を播の子と注しているのを、『北史』によつて播の弟とするなど、底本の誤りを正した所もある。さらに「劉相鄰證」の条には、「道春或時圖書編ヲ見ルニ」の語も見える。内容からしても、羅山が朝鮮版をもとにして著した注釈書として間違いなからう。

さらに、『道春棠陰比事加鈔』の外題を持つ刊本がある。所見本(国会図書館本、本学山岸文庫本、東大総合図書館本)は、いずれも上下下巻を各巻さらに「卷上之上」「卷上之下」のごとく二つに分ち、六冊本の体裁をとる。最初に田澤の序、次に桂萬榮の序、次に目録(いずれも訓点・フリガナ付き)、そして本文に入る順は、元版系統(朝鮮版)に一致する。直接の底本は、朝鮮版(元版)か、和刻の古活字版、あるいは加点(訓訳)整版本等の日本刊本か(日本刊本については後述)、一概には定めかねる。本文各話の注釈の形式であるが、まず訓点・フリガナ付きの本文を掲げ、次にその翻訳を示し(漢字・カタカナ交り、人物についての解説なども適宜織り込む)、次に一字下げて出典の説明をなし、さらに鄭克の評語の本文(訓点・フリガナ付き)を掲げ、次にその評語についての翻訳解説(漢字・カタカナ交り)を続けている。欄外には、朝鮮版(元版)にならつて、「釋寃」等の標目を掲げる。万治二年、林鶯峰編になる羅山の編著書目中には、「棠陰比事抄 三卷」とあるが、その「棠陰比事抄」に、この『棠陰比事加鈔』を擬することは、にわかにはできない。むしろ、該『棠陰比事加鈔』巻中之下「王臻弁葛」の条に、「羅山先生云。古意安<sup>イアン</sup>ノ云。駿河<sup>スルカ</sup>ニモ野葛アリト。野葛ノ訓ハ。ナヘワリト云也」とあることからすれば、羅山の講義を聞いた門人の著作と考える方が妥当であろう。因みに、先の『棠陰比事諺解』をこの『棠陰比事加鈔』の別題とする解説があるが、両者は全くの別書である。羅山編著書目の『棠陰比事抄』に擬するとすれば、むしろ先の『棠陰比事諺解』の方がふさわしいと言えようか。

## 五 和刻諸版

『棠陰比事』の日本刊本が、全て朝鮮版(元版系統)の流れを汲むものであること(改行まで同じ)は前述したが、ここで管見に入

った和刻諸版の一応の分類・整理をしておく。左に分類したもののうち、(1)・(2)の古活字版は白文のままの和刻、(3)・(4)は訓点と、難語にはフリガナを施した加點本（厳密には訓訳本）である（仮名草子の『棠陰比事（物語）』については、翻訳書ゆえ除外する）。以下、大体、推定刊行順に解説を加える。

(1) 有界古活字版

大本。三卷（上中下）一冊。縦三〇・〇糎、横二〇・五糎。外題は「棠陰比事 上中下 完」と直接墨書（後筆）。内題・尾題は朝鮮版に同じ。行数、半葉十行（有界、一行十八字）。匡郭、四周双辺、縦二三・五糎、横十七・四糎。紙数、序四丁（田澤及び桂萬榮）、目録四丁、上卷二十八丁、中卷二十七丁、下卷三十四丁。版心は粗黒口、花口魚尾、（版心の）記載は、目録のところが「棠陰目録」となっている所のみが朝鮮版と異なる（朝鮮版は「棠陰比事目録」。欄外に「釋寃」等の標目あり。刊記なし）。

所見本は内閣文庫蔵本（林家旧蔵本、墨で加點されているが、この訓点は、羅山手沢本の朝鮮版書写本に同じ）。大東急記念文庫・旧雲村文庫等々にも同版が存する（朝倉治彦氏「未刊仮名草子集と研究(二)」の「棠陰比事物語」解題、和田萬吉氏「古活字本研究資料」等）。川瀬一馬氏『増古活字版の研究』には、内閣文庫本の写真（本文第一丁表）が載る。刊年は不明。和田氏は、料紙より推して「慶長年間カ」とするが、前述したように、羅山手沢本の識語の元和五年迄にこの版本が刊行されていたと考えるのは困難で、それ以後の刊とすべきであろう。なお、東洋文庫蔵の、元和年間中の刊とされる無界古活字版『祥刑要覽』（内題・尾題「祥刑要覽上」）の卷末に、「下巻者即棠陰比事也」とあることから、この『祥刑要覽』と僚巻をなす『棠陰比事』があつたとも考えられているが、実際に刊行されたかどうかは未詳である。この有界本と、次に述べる無界古活字版との刊行の先後は決定的なものではないが、底本の朝鮮版（または元版）が有界であることを考えて、しばらくこの順に置く。無界古活字版については、寛永元年三月刊、無界古活字版『祥刑要覽』（田中長左衛門板）と同種活字という考証もあり（川瀬氏前提書）、その考証が正しく、また、有界本と無界本の先後関係が前記の推定通りとすれば、元和五年以降寛永初年までの刊となる。川瀬氏はさらに、この有界本と次の無界本を同種活字の異植字版とされるが、やや疑問もある。朝倉氏は、東洋文庫蔵『三体詩抄』『孝経大義』と同種活字とされる（前提書）。誤植等による、朝鮮版との主要な異同は、他の諸版の異同とともに、解説の末尾に一括して表に掲げる。

(2) 無界古活字版

大本。三卷一冊。縦二七・六糎、横一九・九糎。外題は「棠陰比事」と直接墨書（後筆）。内題・尾題、朝鮮版に同じ。行数、半葉十行（無界、一行十八字）。匡郭、四周双辺、縦二三・三糎、横一七・一糎。紙数・版心等は(1)に同じ。欄外に標目あり。刊記なし。

所見本は東大総合図書館蔵本(墨・朱による訓点・注・校合等あり。訓点は羅山のものとはほぼ同じ)。陽明文庫・旧安田文庫等々にも同板が存する(川瀬氏前掲書他)。前述のように、寛永元年版『祥刊要覧』と同種活字とすれば、それと近接した時期の刊か。

(3) 校異注記・整版本

(イ) 関吉右衛門版

大本。三卷一冊。縦二八・二種、横一九・九種。外題は「棠陰比事 完」と直接墨書。内題・尾題、朝鮮版に同じ。半葉十行(無界、一行十八字)。匡郭、四周单边、縦二二・七種、横一七・二種、紙数・版心等は、(1)・(2)に同じ。欄外に標目あり。刊記、「二条鶴屋町 関吉右表門<sup>開</sup>板」(終丁裏ノド)。

所見本は都立中央図書館加賀文庫蔵本。他に、神宮文庫本も同版(朝倉氏前掲書)。返り点・送りガナ・(難語には)訓がついた加點本(厳密には訓読本)である。本文に疑問のある所は、対校本との校異等を欄外に注記するのが特色(対校本は不明。注記については、解説の諸版異同表参照)。直接の底本は有界・無界の古活字版のいずれかと思われるが、一部異なる所もあり、確言できない。(ロ)の風月宗智版との先後は、両版の刊記のいずれが入木か判然とせず、また両書肆の活動期間も手がかりにできず、これも確言はできないが、版面の状態は、こちらがやや良いものと見て、しばらくこの順とする。刊年は不明。関吉右衛門の刊行書には他に、『醫方大成論』『証類備用本草序例』(ともに元和二年刊)等がある。

(ロ) 風月宗智版

大本。三卷一冊。縦二七・八種、横二〇・一種。外題は、左肩後補の单枠の書題簽に「棠陰比事」とある。内題・尾題、朝鮮版に同じ。半葉十行(無界、一行十八字)。匡郭、四周单边、縦二二・七種、横一七・二種。紙数・版心等は、(1)・(2)・(3)に同じ。欄外に標目あり。刊記は、「風月宗智刊行」(終丁裏ノド)。

所見本は静嘉堂文庫蔵本。(イ)の刊記の部分が、右のように変わっているだけで、他は全く同版(同一板木使用)である。「風月宗智」は、初代風月庄(荘)左衛門、京二条通観音町にあった書肆。寛永四年刊という『長恨歌伝』、同五年刊の『国花集』あたりを最初期の出版書として、以後、主として儒・医書を盛んに刊行している事は周知の通りである。刊記に「風月宗智」の名がある刊行書の下限は、慶安二年『神皇正統記』であるので(矢島玄亮氏『徳川時代出版者出版物集覧』、井上隆明氏『近世書林版元総覧』、彌吉光長氏『京の風月と江戸の慶元堂』(著作集3所収)、この『棠陰比事』も、慶安以前の出版と推定される。

(4) 山本北山校訂・整版本

山本北山(宝曆二年—文化九年)の校訂になる版であるが、何度も刷を重ねたとおぼしく、様々な刊記の本が存在する。相版の奥

付のものもあるが、いずれも実質的には青藜閣こと伊原屋伊八の刊行であることは、北山がその序の中で、出版の経緯にふれていることから確実である。同一板木による重刷ゆえ、最初に一本の書誌を示し、他は奥付と留意すべき点を記すにとどめる。

(イ) 勝村治右衛門・秋田屋太右衛門・須原屋伊八連名版

大本。三卷三冊。縦二六・六糎、横一九・三糎。原題簽、左肩双辺、「棠陰比事 上(中・下)」。内題・尾題、朝鮮版に同じ。半葉十行(北山の序のみ有界、他は無界、一行十八字)。匡郭、四周单边、縦二二・九糎、横一七・三糎。見返しに、

宋四明桂先生編著

日本東都北山先生閱

## 棠陰比事

江都 青藜閣

とあり。上巻は、巻頭に北山の「刻棠陰比事序」(署名「北山山本信有撰」)四丁・田澤の序二丁・桂萬榮の序二丁・本文二十八丁、中巻二十七丁、下巻三十四丁(跋等なし)。版心は、上は白口・下は粗黒口で、北山の序が「序 一(四)」となっており、他は和刻(1)~(3)と同じ。(1)~(3)にあった欄外の「釋冤」等々の標目を欠く。奥付は、

京都寺町通松原下

勝村治右衛門

書肆

大板心齋橋安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸下谷池之端仲町

須原屋伊八

となつている(書肆名部分の右上に、「文政七甲申秋發行」の文字がかすかに見える。別書の刊記を流用し、年月日に墨を付けずに刷ろうとしたものが、不注意のため、前の墨を拭い切れず、こうしたものになったと想像する)。

所見本は内閣文庫蔵本(番号「30040」)。

(ロ) 須原屋伊八単独版A

書賈

江戸淺草寺町二丁目

須原屋伊八

の奥付のあるもの。

所見本内閣文庫蔵本(30016・30049・30050など)。

(イ) 須原屋伊八単独版 B

江都 淺草孝町二丁目  
書林 須原屋伊八

の奥付のあるもの。

所見本、東大総合図書館本・国会図書館本・山岸文庫本（山岸文庫本は、北山序が萬榮の序の次、目録の前に位置する）等。

(ニ) 須原屋伊八単独版 C

東都書林 東叡山下池之端仲町  
須原屋伊八梓行圓

の奥付のあるもの（印は朱字で「叡麓書房」とある）。見返しは白紙、また北山序も欠く。

所見本、内閣文庫蔵本（303）。

(ホ) 無刊記版 A

下巻の巻末に須原屋の蔵板目録（六丁）あり。見返し白紙。

所見本、内閣文庫蔵本（303）。

(ヘ) 無刊記版 B

(イ)の項に記した見返しを持つゆえ、青藜閣・須原屋伊八の刊行にかかることは確実である。

この版は、北山の序に年時を記していないため、いつ校訂が行われたか不明。また初刷の刊年も不明である（大体、十八世紀後半十九世紀初頭）。返り点・送りガナ・フリガナを施してはいるが、(3)版と比較すると、フリガナ（難語の訓）は少ない。羅山の訓と異なる所もある如くである。直接の底本は、(3)の整版本と思われるが、朝鮮版をも参照したらしいふしもある。

右の諸版の朝鮮版との主要な異同箇所を、(3)版の校異箇所を参考にしつつ、左の表に示す。諸版の校訂の様、また相互の関係を考える際の一助とされたい（参考のため、『棠陰比事加鈔』の本文についても表に併せ取める。訓点は省いた）。



異同箇所	諸版
上卷8ウ・5行 (知其死が正) 上22ウ・1 (肺鹿が正) 上27ウ・6 (梵修が正) 中1ウ・6 (傳琰が正) 中2オ・8 (名實が正) 中17オ・2 (肌膚が正) 下2ウ・2 (處が正) 下4ウ・7 (覆其状が正) 下13オ・4 (孫之其孫也)	朝鮮版 (羅山藏 写本も)
知其死 肺鹿 梵修 傳琰 名實 肌膚 處 覆其状 模金 手殺其父	(1) 古活字版 (有界)
知其死 肺鹿 梵修 傳琰 名實 肌膚 處 覆其状 模金 手救其父	(2) 古活字版 (無界)
知其死 肺鹿 梵修 傳琰 名實 肌膚 處 覆其状 模金 手救其父	(3) 整版 (校異注記) [括弧内は頭注]
知其死 肺鹿 梵修 傳琰 名實 肌膚 處 覆其状 模金 手殺其父	(4) 整版 (山本本)
知其死 肺鹿 梵修 傳琰 名實 肌膚 處 覆其状 模金 手殺其父	加鈔

## 六 常磐松文庫本翻刻

(凡例)

- 一、本学常磐松文庫蔵『棠陰比事』(朝鮮版)の全文を翻刻する。
  - 一、字配り・改行等は、底本のままとした。
  - 一、漢字は、極端な異体字を除き、底本のままと存した。従って、正字・略字・俗字・若干の異体字が混在するが、それはほぼ底本の用字法を踏襲したものである。
  - 一、底本の誤植と認められるものもそのまま翻刻に付した。
  - 一、各話冒頭に付された「釋冤」「察姦」「覈姦」等の標目は、上欄匡郭外に記されたものである。注意されたい。
- (付記) 翻刻原稿の作成につき、一部、実践女子大学大学院生(文芸資料研究所職員)上野英子氏の御助力を得た。記して心より感謝申し上げます。

刑獄事之至重而疑獄為尤重任事者詎容不重用其心哉古昔盛時衆以典刑未始詳於條目及後世五刑之屬至于三千而不以為繁蠻夷寇賊卑陶作士兵與刑合為一官而周官司刑之屬其多至於六十蓋嘗考之帝降而王世變風移人心不古情偽萬端成周小司寇聽萬民之獄訟以五聲求民情在呂刑則謂之惟貌有稽然所謂五辭簡孚必繼之曰無簡不聽先儒謂無簡云者獄辭之無可核實是為疑獄既非貌之可稽聲之可聽其欲勿誤也鮮矣此近代所以有和氏疑獄集鄭氏折獄龜鑑宋提刑洗冤錄已行於世其要皆期於勿誤云爾大德癸卯澤被命推刑蘭豐得四明桂氏所編棠陰此事觀其釋冤辨誣發發伏以至察隱鉤隱之智迹賊誦賊之術如良醫脈脈候之生死明鑑別物象之妍媸一見瞭然在目輒因公退之暇取開封鄭氏評語列之各條之下且復揭其綱要疏其音義而標題於上命工繕梓用廣其傳俾凡為士師之官掌刑之吏得是書而熟閱之不惟足以資夫人之多識亦庶幾乎天下無冤民無冤民則氣和形和聲和而天地之和應矣其於嘉師祥刑豈曰小補云時至大元年孟冬吉日承事郎豐州路總管府推官居延田澤謹序

(六行あき)

(序1才)

(序1ウ)

(序2才)

(白紙)

棠陰比耻至事序

開禧丁卯春僕以饒之餘于尉趨郡書滿糾曹孫公起予武陵人也留欵竟日話次因及臬切法也書事謂凡典獄之官實生民司命天心向背國祚脩短係焉比他職掌尤當謹重近者番易音陽尉胥為人所殺昏暮莫知主名承捕之吏續執陽兪達以告證佐皆具亦既承伏矣且謀連三人結欵無一異辭其獨不能無疑躬造臺府請緩其事重立賞榜廣布耳目俾緝正囚未幾果得龔立者以正典刑不然橫致四無辜於死地銜冤千古咎將誰執萬榮聞之音句驚然歛衽因嘆吾夫子三絕韋編特著其議獄緩死之象於中孚而古之君子亦盡心於一誠不可變者公其有焉既而東歸參選待次建康犴音岸曹屢省斯事若有隱憂遂於暇日取和魯公父子疑獄集參以開封鄭公折獄龜鑑比事屬辭聯成七十二韻號曰棠陰比事凡與我同志者類能上體累代欽恤之意下究諸公編劇音磨之心研精極慮不謂空言則棠陰著明教棘林無夜哭曷勝多福之幸是用弗嫌於近名擬鐔諸木以廣其傳歲在重光協洽閏月望日四明桂萬榮序

(八行あき)

(序2ウ)

(序3才)

(序3ウ)

(序4才)

(白紙)

(序4ウ)

棠陰比事目錄

四明桂 萬榮 編集  
居延田 澤 校正

卷上

卷中

向相訪賊  
曹攄明婦  
程顯詰翁  
李崇還泰  
歐陽左手  
沈括額喉  
程琳炷竈  
妾吏酖宋  
彥超虛盜  
孫甫春粟  
宗元守辜  
桑憚閉柵  
任城示靴  
李傑買棺  
蘇請附柩  
子產知姦  
思菟詐客  
季珪雞豆  
定牧認皮

錢推求奴  
裴均釋夫  
丙吉驗子  
黃霸叱奴  
惟濟右臂  
南公塞鼻  
強至油幕  
玉素毒郭  
道讓詐囚  
許亢焚舟  
魏濤證死  
蘇秦徇市  
楊津獲絹  
重榮咄箭  
賈廢追服  
莊遵疑哭  
佐史誣裴  
張舉猪灰  
滄州市脯

(目錄1ウ)

(目錄1才)

張受越訴  
王質母原  
允濟聽葱  
呂婦斷腕  
崔黯搜帑  
杜鎬毀像  
傅令鞭絲  
楊牧笞巫  
程戡仇門  
符融沐枕  
宗裔卷袖  
江分表裏  
胡質集鄰  
蔣常覘嫗  
劉相隣證  
袁滋鑄金  
程薄舊錢  
公綽破樞  
柳寃瘡奴  
李公驗櫻  
顯知子盜  
郭躬明誤  
商原詐服  
薛絹互爭

斐命急吐  
馬亮悉貸  
彭城書菜  
包牛割舌  
張輅行穴  
次翁戮男  
李惠擊塩  
薛向執賈  
仲游帥宇  
獄吏滌屨  
高防校布  
童辨朱墨  
高柔察色  
思彥集兒  
韓參乳醫  
孫寶秤散  
王瓌故簡  
元膺擒羣  
王扣狂嫗  
王臻辨葛  
孫料兄殺  
希亮救亡  
竇阻免喪  
符盜並走

(目錄2ウ)

(目錄2才)

卷下

蕭儼震牛

文成括書

孝肅杖吏

方偕主名

陳議揮取

御史失狀

偉冒苑祚

次武各驅

張昇窺井

劉混焚屍

王錫匿名

希崇並付

王珣辨印

孫登比彈

梁適重詛

曹駁坐妻

孫亮驗蜜

傅隆議絕

戴爭異罰

刑曹駁財

從事函首

無名破冢

王曾驗稅

韋臯劾財

懷武用狗

郎簡校券

周相取掾

宋文墨迹

胡爭竊食

國淵求賤

處效鄧賢

憲之俱解

蔡高宿海

高防劾病

至遠憶姓

齊賢兩易

尹洙檢籍

德裕模金

袁彖惡淫

孔議詈母

杜亞疑酒

漢武明繼

徐詰緣例

左丞免謫

乖崖察額

行成叱驢

司空省書

趙和贖產

(目錄3才)

(目錄3ウ)

(目錄4才)

柳設榜牒

朱詰賊民

崇龜認刀

張鷟搜鞍

承天讖射

陳具飲饌

孔察代盜

司馬視鞞

濟美鈎篋

延尉訊獵

棠陰比事目錄終

(目錄4ウ)

棠陰比事卷上

向相訪賊 錢推求奴

釋冤

向敏中丞相判西京有僧暮過村舍求宿主人不許求寢於門外車箱中許之是夜有盜入其家携一婦人并囊衣踰墻而出僧不寐適見之自念不為主人所納而強求宿明日必以此事疑我而執詣縣矣因亡去夜走荒草中忽墜智音纒癡音癡井而踰墻婦人已為人所殺尸在井中血汚僧衣主人蹤跡捕獲送官不堪掠音亮治遂自誣云與婦人奸誘以俱亡恐敗露因殺之投尸井中不覺失脚亦墜於井臟與刀在井傍不知何人持去獄成皆以為然敏中獨以臟仗不獲疑之詰溪吉問也問數四僧但云前生負此人命無可言者固問之乃以實對於是密遣吏訪其賊食於村店有媼衣遇切老母也聞其自府中來不知其吏也問曰僧某獄如何吏給音殆欺也之曰昨日已

(1才)

答死於市矣。媼歎息曰：「今若獲賊，如何？」吏曰：「府已誤決，此獄雖獲賊，不敢問也。」媼曰：「然則言之無害，彼婦人乃此村少年某甲所殺也。」吏問其人安在，媼指示其舍，吏往捕，并獲其贓。僧始得釋。出涑水記聞

(1ウ)

鄭克曰：按士之察獄，苟疑其寃，雖囚無寃，詞亦不可遽決。

### 釋寃

宋錢若水為同州推官，有富家女奴逃亡，父母訴於州錄參常貸富家錢，不獲，遂劾富民父子共殺女奴，失尸於水，或為元謀，或為加功，罪皆應死。獄具，若水獨疑留而不決。州郡上下切怪之。錄參誣若水受賄，若水但笑謝而已。旬餘詣州屏人語曰：「某留獄者，所以訪求女奴，今得之矣。」因送于州，既而知州從簾中推出，示其父母，父母驚曰：「是也。」於是富民父子皆得釋。知州欲奏其功，固辭不願。朝廷聞之，驟加進擢。涑水記聞

(2才)

曹攄明婦 裴均釋天

### 釋寃

晉曹攄字顏遠，為臨淄令，日有寡婦養姑甚謹，姑以其年少，勸令改適。婦守節不移，姑惡之，密自殺親黨，乃以誣其婦，婦不勝官司，拷訊即自誣伏。攄抽居初到，疑其寃，更加辨究，具得情實，時稱其明。

(2ウ)

辨誣

察姦 唐裴均鎮襄陽，部民之妻與其鄰通，託骨蒸之疾，謂夫曰：「醫者言食獵犬之肉，即差。」夫曰：「

吾家無犬，奈何？」妻曰：「東鄰犬常來可繫，而屠之，夫用其言以肉餉式亮切，妻妻食之餘，乃留於篋，笱夫出命，鄰人遂訟于官，收捕鞠問，立承且云：「妻所欲也。」均曰：「此乃妻有外情，蹟音致玲也猶陷井。」夫於禍耳，追劾之，果然。妻及奸者皆服罪而釋其夫寃。

程顯詰翁 丙吉驗子

程察院知澤州晉城縣，日富民張氏子其父死，未幾有老父至門曰：「我汝父也，來就汝居。」且陳其由，張氏子驚疑，相與詣縣請辨。老父曰：「業醫，遠出，妻生子貧不能養，以與張子某年月日某人抱去，某人見之，顯曰：「歲久矣，汝何說之詳也？」老父曰：「書于藥法冊後某歸而知之，使以其冊進，乃曰某年月日某人抱兒與張三翁，顯問張氏子年幾，曰三十六，又問爾父年幾，曰七十六，謂老父曰：「是子之生，其父纔年四十，人謂之張三翁乎？」老父驚駭服罪。此聞之前輩。

(3才)

(3ウ)

鄭克曰：按凡為巧詐，必有缺漏推覈丁革切也。實已至姦，欺自露如檢戶籍以視孤女所冒之非，校年齒以驗老父所記之妄，皆此術也。唯盡心者則能之耳。

丙吉字少卿，漢宣帝時，陳留有一老人年八十餘，家富而無子，祇有一女已適人，其妻卒，翁又取一妻，復生一子，後翁死，其妻育其子。

數年前妻女欲奪財物乃誣後母所生子非我父之子也郡縣不能斷聞於臺省吉為廷尉乃曰吾聞老人之子不耐寒日中無影時

(4才)

八月取同歲小兒均服單衣唯老人之子畏寒變色又令與諸兒立於日中唯老人之子無影遂奪財物歸後母之男前女服誣母之罪

李崇還泰 黃霸叱奴 音似長 婦曰奴

擿姦

後魏李崇為楊州刺史縣民荀泰者有子三歲失之後見在趙奉伯家各言己子並有鄰證郡縣不能斷崇乃令二父與兒各別禁數日忽遣獄史謂曰兒已暴卒可出奔喪泰聞之非不自勝奉伯嗟嘆而已殊無痛意遂以兒還泰奉伯服罪 出北史 本傳

(4ウ)

擿姦

前漢潁川太守黃霸本郡有富室兄弟同居弟婦懷妊其長姦亦懷妊胎傷匿之弟婦生男長姦輒奪取以為己子論爭三年訴於霸霸使人抱兒於庭中乃使娣 音弟 惟 娣 曰 娣 姦競取之既而俱至姦持之甚猛弟婦恐有傷於手而情甚悽慘霸乃叱長姦曰汝貪家財欲得此子寧慮意頓有所傷乎此事審矣姦伏罪

出風 俗通

歐陽左手 惟濟右臂

證憲

都官歐陽曄知端州有桂陽監民爭舟歐死獄久不決曄 為 輒 出囚飲食之皆還于獄獨

(5才)

留一人留者色動曄曰殺人者汝也囚不知所以然曄曰吾視食者皆以右手汝獨以左今死者傷右肋此汝殺之明也囚乃服 出歐陽文 忠公所撰

忠公所撰

撰志

鄭克曰按曄以觀其驗狀云傷右肋死故因飲食視其所用手彼獨左手持匕者乃是歐殺之人也以此為證其辭自屈與錢惟濟辨誣之術同矣苟非盡心察獄則亦豈能然耶

(5ウ)

辨誣

錢惟濟留後知絳州民有條桑者盜強奪之不能得乃自斫其右臂誣以殺人官司莫能辨惟濟引問面給以食而盜以左手舉匕箸因語之曰他人行刃則上重下輕今下重上輕正月左手傷右臂也誣者乃伏 見本傳

鄭克曰按此以其傷下重上輕知為自用刃矣但疑在右臂故給之食以驗其手而誣狀灼然彼安得不服耶

(6才)

釋冤

沈括頰喉 南公塞鼻  
沈內翰云世人以竹木牙骨之屬作叫子置喉中頰之能作人言予謂瘖者若頰冤無以自明取叫子令頰之作聲如傀 苦 猥 切 傀 魯 猥 切 也 戲 子粗能辨其一二冤或可伸 見 沈 括 筆 談

鄭克曰按狂者人皆忽略瘖者人所鄙棄有冤不伸誠亦可憐故著此事使盡心君子得以為鑒也

鞠情

李南公尚書提點河北刑獄有班行犯罪下獄按之不服閉口不食百餘日獄吏不敢拷訊甚以為患訴于憲使南公曰吾能立使之

(6ウ)

食引出問曰吾欲以一物塞蘇則切汝鼻汝能終不食乎其人懼即食且服罪蓋彼普服氣以物塞鼻則氣結而不通故懼是以自服此亦博聞之效也聞之士林

鄭克曰按士大夫不為誘脅所動者近於孟子之不動心矣彼有負犯則豈能然斯可反而用也故鞠情之術有在於是者陳表破械是誘之也南公塞鼻是脅之也所謂脅之者不必考掠慘酷亡感切酷也要在中其忌諱使之懼怖也然畏服故於塞鼻之說亦有取焉

程琳炷竈 強至油幕

程宜徽知開封府時禁中失火延燒兩宮宦者根治諸縫人已誣服乃送府具獄琳辨其非是又命工圖火所經處且言後宮人多而居隘其炷淵圭切竈近板壁久燥而焚此殆天災不可罪人上為寬其獄卒無死者見本傳

鄭克曰按琳圖火所經處以辨掠服縫人之非是也火發於後宮而人多居隘苟欲根治豈無枉濫故曰此殆天災不可罪人於是為寬其獄豈有冤死者耶

強至祠部為開封府倉曹參軍時禁中露積

(7才)

油幕一夕火主守者法皆應死至預聽讞寒獄切疑火所起召幕工訊之工言製幕須雜他藥相因既久得濕則燔府為上聞仁宗悟曰頃歲真宗山陵火起油衣中其事正爾主守者遂傳輕典見行狀

鄭克曰昔晉武庫火張華以為積油幕萬匹而然此皆油中火發非人所致主者但有守護不謹之罪爾坐以失火則為冤死也

妾吏酖直禁切酒宋 玉素毒郭

范純仁丞相知河中府時錄事參軍宋儋年會客罷以疾告是夜暴卒蓋其妾與小吏為奸也純仁知其死不以理遂付有司按治會儋都甘切年子以喪柩歸移文追驗其尸九竅流血睛枯舌爛舉體如有司訊囚言實毒斃斃側吏切中純仁問斃斃在笈幾巡豈有中毒而能終席耶必非實情命再劾之乃因客散醉歸寘毒酒杯中而殺之此蓋罪人以儋年不嗜斃而為坐客所并且其後巡數尚多欲為他日翻異逃死之計爾見范忠宣公言行錄

(8ウ)

鄭克曰凡善覈姦者必善鞠情也若不得其情則後必譎異而姦人得計矣推覈之際戒在疏略是故漢史稱嚴延年之治獄也文案整密不可得反雖酷吏無足道然於此一節亦有取焉耳

釋冤

釋冤

釋冤

釋冤

釋冤

釋冤

釋冤



迹賊

唐中書舍人郭正一破平壤得一高麗婢名玉素極姝好也艷令專知財物庫正一夜須漿水粥非玉素煮之不可玉素乃毒之良久

(9才)

覓婢及金銀器不得錄奏勅令長安萬年尉石良捕之石良主帥魏昶伍兩有策略請喚

舍人家奴取少年端正者三人布衫籠頭及縛衛士四人問十日內何人覓舍人家衛士

云有投化高麗留書遣付舍人牧馬奴索驗之乃云金城坊中有一空宅更無他語石良

往彼處搜之至一宅封鎖甚密打開婢與化士並在其中乃是化士共牧馬奴藏之奉勅

斬于東市

鄭克曰按昶喚舍人家奴取少年端正者

三人布衫籠頭欲以誦取之也又縛衛士

四人問十日以來何人曾覓舍人家欲以

迹求之也雖兼用二術然誦賊不效而迹

賊效矣譬猶得雀者網之一目而不可以

蘇無名董行成類矣特著其事以勸能者

諂盜

漢慕容彥超為郵帥日置庫質錢有奸民以

偽銀二錠質錢十萬主吏久之乃覺彥超知

(10才)

自占所質以償之民皆爭以所質物自言已而得質偽銀者執之服罪

鄭克曰彼有諂之不出者何哉或盜轉而

之他或盜知其為諂也是故用諂宜密而

速與兵法同矣彥超出五代史本傳

後魏高謙之字道讓為河陰令有人囊盛瓦

磔音歷小詐作金以市人馬因而逃走詔令

諂盜

人捕之謙之乃枷一囚立於馬市宣言詐市

馬賊欲刑之密造人察市中私議者有一人

忻然曰無復憂矣遂執送案問悉獲其黨服

罪出北史高恭之傳謙之其兄也

鄭克曰按諂盜之術與擿竊同彼亦用諂

以擿之也

孫甫春書容切擿米也粟許元焚舟

待制孫甫為華州推官日州倉粟惡吏當負

錢數百萬轉運使李紘以吏屬甫甫乃令取

斗粟春之可棄者十纜一二又試之亦然吏

遂得弛繫負錢纜數十萬而已紘因薦之見

鄭克曰按嚴明者非若世俗以苛為嚴以

刻為明也持循事理照察物情之謂也以

(11才)

嚴明 是持循照察之效也可不謂之嚴明乎  
待制許元初為發運判官患官舟多虛破釘

鞠之數蓋以陷於木中不可稱盤故得為姦

(11才)

元一日命取新造船一隻焚之秤其釘鞠比  
所破纜十分之一自是立為定額

見魏泰東  
軒筆錄

鄭克曰按元不治虛破之罪而但立為定  
額可也然亦異乎劉晏矣蘇軾尚書說晏

為江淮發運使時於楊州造船每隻載米

一千石破錢一千貫而實費不及五百貫

或譏其枉費晏曰大國不可以小道理凡

所創制須謀經久船場執事者非一有餘

剩衣食則私用不窘

渠頌切  
困也

而官物牢固

由是船場人皆富贍五十餘年餽運不闕

(12才)

至咸通末有吳堯卿者始勘驗每船合用

物料實數估給其直無復寬剩而船場自

此破壞饋運自此闕絕晏言良可信也元

定釘鞠額無乃類吳堯卿乎雖幸而不至

敗事然則嚴明乃俗士所誇君子所鄙不

可為後世法也

宗元守辜 魏壽證死

議罪 待制馬宗元少時父麟毆人被繫守辜而傷

者死將抵法宗元推所毆時在限外四刻因

訴於郡得原父罪由是知名

鄭克曰辜限計日而日以百刻計之死在

限外則不坐毆殺之罪而坐毆傷之罪法

(12才)

辨誣

無久近之異雖止四刻亦在限外有司議  
法自當如此不必因其子訴而後得原也  
苟為鹵莽或致枉濫

魏壽朝奉知沂州永縣兩仇鬪而傷既決遣  
而傷者死壽求其故而未得死者子訴于監

司監司怒有惡語壽嘆曰官可奪囚不可殺

後得其實乃因是夕罷歸騎及門而墜死鄰

證既明其誣自辨

見陳無  
撰志

鄭克曰按此蓋死者子因其嘗鬪以誣仇

人也夫鬪而即決者傷不至甚法無保辜

今乃誣以傷而死也且辜限內死若有他

故唯坐傷罪彼騎而墜是他故也亦可見

其傷不應保辜也

壽音  
桃能求得其實辨明

其誣可謂盡心矣

桑憚閉柵 蘇秦徇松閭切行  
以令衆也市

迹賊

桑憚初以右班殿直為永安巡檢明道末京  
西早蝗有惡賊二十三人樞密院召憚亦授

以賊姓名使捕之憚曰盜畏吾名決潰去宜

先示以怯至則閉柵

音策村  
寨也

戒軍吏不得出

其下數請自效皆不許乃夜與數卒服盜服

迹盜所常行處入民家老小皆走獨一媪

音  
媪

也 女老 留為治飲食如事羣盜憚歸閉柵三日

復自携饌就媪而以餘遺媪媪以為真盜乃

稍就與語因及羣盜媪曰彼聞桑殿直來皆

遁去近知閉營不出漸還矣某在某處某在

(13才)

某處憚後三日又往厚遺之遂以實告曰我  
桑殿直也為我察盜之實的居處切勿泄乃  
分軍士悉擒獲之見本傳

(14才)

鄭克曰按憚先閉柵譎賊使不走乃因媼  
迹賊使不覺然後悉擒之皆兵法也後漢

虞詡況羽切為朝歌長時賊甯季等數千人

攻殺長吏屯聚連年州郡不能禁詡到官  
既誘令劫掠伏兵殺之又潛遣貧人能縫

者傭作賊衣以綵線縫其裾為幟記也有出

市里者吏輒擒之賊遂駭散咸稱神明是

亦兵法也然於迹賊之術悉皆有所考焉

顧用者何如耳故並著之以備採擇也

### 譎賊

蘇秦左齊齊大夫多與之爭寵使人刺之不  
殄而走求賊不得秦且死乃謂齊王曰臣死

之後王車裂臣以徇聞切行以示衆也于市曰蘇秦

為燕作亂于齊如此則刺臣之賊必得矣王

如其言殺蘇秦之賊果出乃誅之春秋後語

### 任城示靴 楊津獲絹

### 迹盜

北齊任城王潛音諧領并州刺史時有婦人臨

汾水浣音緩衣為乘馬行人換其新靴而去

者婦人持故靴詣州訴之潛召城中諸媼以

靴示之紹曰有乘馬於路被賊殺害者遺此

一靴得非親屬乎一媼撫膺哭曰兒昨着此

回妻家也即捕而獲之出北史本傳

鄭克曰按潛留故靴者將以迹求之也給

(15才)

### 譎賊

諸媼者兼以譎取之也與敝買皮事頗相  
類然居城諸媼所以可召者北齊承後魏  
喪亂之後并州城中居人不多雖盡召之  
亦不為擾苟或蕃庶當如楊津下教而已  
此在隨事制宜也

周楊津字羅漢為岐州刺史有武功人竇絹  
三百匹去城十里為賊所劫時有使者馳騎  
而至被劫人因以告之使者到州以狀白之

(15才)

津乃下教曰有人着某色衣乘某色馬在城  
東十里被殺不知姓名若有家人可速收尔  
有一老母行哭而出云是己子於是收捕并  
絹俱獲出北史楊播傳津其子也

(14才)

鄭克曰按此與高潛留靴給媼術同彼以  
靴為迹此以衣與馬之色為迹而皆用譎  
取之其異者彼實得靴則主於迹而兼以  
譎此空言衣與馬之色則主於譎而示以  
迹也

### 李傑買棺 重榮咄箭

### 察姦

### 懲惡

唐李傑為河南尹有寡婦告其子不孝其子  
不能自理但云得罪於母死所甘分傑察其

狀非不孝傑謂寡婦曰汝寡居十年惟有一

子今告之罪至死得無悔乎寡婦曰無賴不

順於母寧復惜之傑曰審如此可買棺采取

兒尸因使人覘窺也其後寡婦既出謂一  
道士曰事了矣俄將棺至傑尚冀其悔再三

(16才)

喻之寡婦堅執如初時道士立於門外密令擒之一問承伏曰某與寡婦有私嘗為兒所制欲除之乃杖殺道士及寡婦即以棺盛之

出唐書本傳

懲惡

晉安重榮鎮常山日嘗有夫妻共訟其子不孝者重榮面加詰責抽劍令自殺之其父泣曰不忍也其母詬詈仗劍逐之重榮問之乃繼母也因咄當沒切出自後射一箭而斃聞者莫不增快由是境內以為強明之政

鄭克曰按古之後婦嫉前妻子亦已多矣苟得其情則切責而嚴戒之可也何必取快一時加之非法乎語曰不教而殺謂之虐重榮固不足道此事亦非所取舊集載之故略辨焉

蘇請柩 賈廢追服

議罪

蘇家為大理寺詳斷官時有父卒而母嫁後聞母死已葬乃盜其柩而音附合葬也于父法當死案音獨曰子盜母柩納于父墓豈可與發冢取財者比請之得減死見本傳

鄭克曰按侯瑾少卿提點陝西刑獄時河中有民父死其母改嫁十餘年亦死輒盜發冢取其棺與父合葬法當大辟有司例從輕瑾請著于令此乃用案所請為例者蓋母與後夫同穴而葬於是發冢取其柩故論以劫墓見尸之法而請之僅得減死

(16ウ)

也張唐卿狀元通判陝州時民有母再適人而死者及父之葬子恨母不得相聚乃盜喪同葬之有司請論如法唐卿權府事乃曰是知有孝不知有法耳遂釋之以聞則異乎案所請者蓋後夫尚在而母死未葬獨盜其喪以歸非發冢取棺則法亦輕矣雖釋之可也

議罪

待讀賈黯判流內銓時益州推官桑澤在蜀三年不知其父死及代還銓吏不為領文書始去發喪既除服且求磨勘黯乙減言澤與父不通問者三年借非匿喪是豈為孝卒使坐廢田里出王珪撰志

鄭克曰按黯議澤罪若深文者蓋以名教不可不嚴是春秋誅意之義也

子產知姦 莊遵疑哭

察姦

鄭子產聞婦人哭使執而問之果手刃其夫者也或問何以知之子產曰夫人之於所親也有病則憂臨死則懼既死則哀今其夫已死哭不哀而懼是以知其有姦也出獨異志莊遵為楊州刺史巡行部內忽聞哭聲懼而不哀駐車問之答曰夫遭火燒死遵疑焉因令吏守之有蠅集於尸首吏乃披髻視之得鐵釘焉因知此婦與奸人共殺其夫也即按伏其罪

鄭克曰此其事異而理不異也豈非亦用

(17ウ)

(18ウ)

(18ウ)

子產之言以察奸乎蓋言苟中理無時不  
驗非若譎詐忌人窺測已陳獨狗用輒為  
崇禍逐切也王者發政必占古語盡心君  
子焉可忽哉

(19才)

思兢居陵切 詐客 佐史詆裴

擿姦 唐則天時或告尉馬崔宣謀反勅御史張行  
岷按之告者先誘宣妾藏之乃云妾將發其  
謀而宣殺之行岷按而無狀則天怒令重劾  
終無實則天厲色曰崔宣既殺其妾反狀自  
然明矣妾今不獲何以自雪行岷魚及懼逼  
宣家訪妾宣再從弟思兢多致錢帛募之略  
無所聞耳宣家每議事則獄中告者須知思  
兢疑宣家有同謀者乃詐曰須雇俠音客殺  
告者語了遂侵晨伺於臺側有門客素為宣  
所信任乃至臺路門吏以通告者思兢因罵  
門客曰若陷崔宣必殺汝矣門客悔謝遂引  
思兢於告者之黨搜獲其妾宣始得免

遊俠

(19才)

鄭克曰按行岷當酷吏任事之時獨不順  
旨妾族平人雖再被詰責亦全其所守故  
卒能辨誣也其不及徐有功者未能無懼  
矣然其懼也但逼宣家訪妾而已則異乎  
懼而失守者可不謂之賢哉史逸其事故  
備言之

證慝

(20才)

辨誣 唐垂拱年羅織事起湖州佐史江琛取刺史  
裴光製書割取其字轉合成文以詐為與徐

敬業反書告之則天差御史往推光款云書  
是光書語非光語前後三使皆不能決或薦  
張楚金能推事乃令再劾推得切不移前款  
楚金憂悶偃臥窓邊日光穿透因取反書向  
日看之乃見書字補葺而成平看不覺向日  
皆見遂集州縣官吏索水一盆令琛投書於  
水中字字解散琛叩頭服罪勅決一百分後  
斬之

(20才)

鄭克曰按此非智筭所及偶然見之耳苟  
卿有言令夫亡箴者終日求之而不得其  
得之非日益明也靜而見之也心之於慮  
亦然要在至誠求之不已也楚金之求獄  
情何以異於此哉是亦盡心之效也

季珪雞豆 張舉豬灰

證慝

宋傅季珪為山陰令有爭雞者訴於季珪季  
珪問早何食一云粟一云豆乃令殺雞破嗉  
有豆焉遂罰言粟者郡人稱為神明出南史本傳

(21才)

鄭克曰按許宗裔之驗臟也問袖線胎心  
用何物一云杏核一云瓦子開見杏核而  
罪言瓦子者其術蓋本於此

證慝

張舉吳人也為句章令有妻殺夫因放火燒  
舍乃詐稱夫被火燒死夫家疑之訴之於官  
妻拒而不承舉乃取豬二口一殺之一活之  
乃積薪燒之察殺者口中無灰活者有灰因  
驗夫口中無灰以此鞫之妻乃服罪

鄭克曰按孫寶以環散一枚之重為證而誣言三百枚之愚顯矣張舉以死猪口中無灰為證而誣言夫燒死之愚顯矣是謂「

(21才)

愚未顯者以物證之則不可諱也然則莊遵守尸而首有蠅集為覈姦有效豈若張舉驗尸而口無灰入為證愚盡理乎

定牧認皮 滄州市脯音甫乾肉也

迹盜

北齊彭城王洸為定州刺史有人被盜黑牛上有白毛長吏韋道健謂從事魏道勝曰使君在滄州日擒奸如神若獲此賊實如神矣洸由乃詐為上府市皮倍酬其直皮至使牛主認之因獲其盜伏罪

迹盜

北齊彭城王洸為滄州刺史有一人從幽州來驢馱鹿脯至滄州界以足疾行遲偶遇一人為伴遂盜驢及脯去明且告州洸及命左右及府僚分市鹿脯不限其價其主見而識之推獲盜者遂遷定州刺史並出北史本傳鄭克曰按洸之二事皆有迹可求若夫詐為上府買皮而倍酬其直乃兼以譎取之者也

(22才)

張受越訴 裴命急吐

鈎應

唐張允濟為武陽令以德教訓下百姓懷之鄰邑元武縣有以特牛依其妻家者八九年間特生十餘牛及將異居妻家不與本縣累政不能決其人乃越界訴於允濟允濟曰爾

(22ウ)

鈎應

自有令何至此也其人垂泣不肯去具言所以允濟遂令左右縛牛主布衫蒙頭將詣妻家村中捕盜牛賊悉問此村牛所從來妻家不知其故恐致連及乃曰此是女婿家牛允濟令發其蒙謂曰此即女婿當以牛歸之

唐衛州新鄉縣令裴子雲有奇策部人王恭戍邊留特牛六頭於舅李璉音晉家養五年產犢三十頭例直十千已上恭還乃索牛舅曰「特牛二頭已死只還四頭老特餘並非汝牛所生恭忿敷斷切怒也之訴於子雲令送恭獄禁取追盜牛賊李璉惶怖至縣子雲叱之曰賊與汝同盜牛三十頭藏汝莊內喚汝共對乃以布衫蒙恭頭立南牆下命璉急吐詞云牛三十頭給是外甥特牛所生實非盜得子雲遣去王恭布衫璉驚曰此是外甥也若是即當還牛更欲何語璉默然子雲曰五年養牛辛苦與璉五頭餘並還恭一縣伏其明察

(23才)

鄭克曰此乃用允濟鈎應之術者但部民則易追而非部民則難追矣故允濟詣彼村中捕盜也然越境有所捕召集一村牛亦是當時可以為此者在異日止合移文追而詰之如趙和者是也但欲巧捷者勢須為此耳

(23ウ)

王質母原 馬亮悉貸音太借也

議罪 王質待制知廬州有盜殺其黨并其質音髭財也

而遁遷者得之質抵之死轉運使楊告駁之  
曰盜殺其徒者死當原質云盜殺其徒而自  
首者當原今殺人而取其質非自首而捕得  
之原死豈法意乎數上疏不報降監舒州靈  
仙觀逾年韓琦知審刑院謂盜殺其徒而不  
首者母音得原見本傳

鄭克曰按首則原之許自新也不首而原  
復何謂耶殺其徒取其質遁音遁去捕得  
初非悔過而貸其死失法意矣宜乎議者  
有是請也

議罪  
尚書馬亮知潭州屬縣有亡命卒剽攻為鄉  
民患或謀殺之在法當死者四人亮曰能為  
民除害而反坐以死豈法意耶乃悉貸之出

鄭克曰按剽匹妙切掠也攻之人於法許捕若  
非名捕者輒以謀殺之則慮有誣枉法所  
不許也能奏聽裁尤為得體云

### 允濟聽葱 彭城書菜

察盜  
唐張允濟初仕隋為武陽令時道中見一姥  
莫補切種葱結菴守之允濟曰但歸不煩守  
老母也種葱結菴守之允濟曰但歸不煩守  
此若遇盜即來告姥如戒歸一宿而葱大失  
姥以告允濟乃召集葱地左右居人呼令前  
一一聽其手遂獲盜葱者伏罪此與受越訴  
傳本

鄭克曰按周禮以五聲聽獄訟求民情一

(24 才)

曰辭聽觀其出言不直則煩二曰色聽觀  
其顏色不直則赧奴版切三曰氣聽觀  
其氣息不直則喘四曰耳聽觀其聽聆不  
直則惑五曰目聽觀其顧視不直則眊音  
明不允濟召集葱地左右居人呼令前一  
一聽之遂獲盜葱者蓋用此術也然其意  
度頗涉於術音炫非不得已而用之則  
與卻雍視盜察其眉睫之間而得其情者  
何以異哉苟未能使人恥為盜不若聽姥  
守之也

(25 才)

(24 才)

### 呂婦斷腕 包牛割舌

察慮  
呂公綽待讀知開封府有營婦夫出於外盜  
夜入舍斷其腕而去都人喧駭胡駭切公謂  
非其夫之仇不宜快意如此遣騎詰其夫果  
獲同營韓元者具奸狀伏誅出王珪所撰志

鄭克曰按此蓋知營婦為人非不良者故  
特疑其夫仇戕音牆害之也既得其事  
乃察其實彼之隱惡將何所遁斯亦可以  
謂之明矣

(26 才)

### 鈎患

包拯副樞初知揚州天長縣時有訴盜割牛  
舌者拯密諭令歸屠其牛而鬻之遂有告其  
私殺牛者拯詰之曰何為割某家牛舌而又

(25 才)

告之其人驚服見本傳

鄭克曰按錢稹嘗知秀州嘉興縣有村民  
告牛為盜所殺稹令亟歸勿言告官但召

同村解之遍以肉餽音饋遺知識或有怨

即倍與民如其言明日有持肉告民私殺

牛者稹即取訊果其所殺此乃用拯鉤隱

之術者蓋以揣知非仇不爾故用此譎使

復出告也昔趙廣漢善為鉤距以得事情

晉灼職略云鉤致也距閉也蓋以閉其術

為距而能使彼不知為鉤也夫惟深隱而

不可得故以鉤致之彼若知其為鉤則其

隱必愈深譬猶魚逃於淵而終不可得矣

是故史稱惟廣漢至精能用之他人效者

莫能及也此士君子材知過人亦庶幾焉

崔黯切 減 搜帑 張輅行穴

察姦 懲惡

唐崔黯鎮湖南有惡少不為鄉里所容乃自  
髡鉗音鈴以依佛教為傭隸假託焚修幻惑

愚俗積財萬計黯始下車恐其事敗乃持牒

詣府云某發願焚修三年今已畢請脫鉗歸

俗黯問三年教化所得幾何曰旋得旋用不

記其數又問費用幾何曰三千緡不啻施智

止如黯曰給者有數納者不記豈無欺隱乃

命搜其室妻帑他義切藏蓄積甚於俗人既

服矯居天切妄即以付法並以財物旋之貧

下詐也

(26ウ)

覈姦 懲惡  
石晉高祖鎖鄴音業縣名時魏州冠氏縣華村僧  
院有鐵佛一軀高丈餘中心且空一旦忽云

佛能語似垂教戒徒衆稱贊聞于鄉縣士庶

雲集施利填委縣申州府高祖莫測其生命

術將尚謙持香設供且驗其事有三術張輅

路音請與偕行詰其妖狀乃率人圍寺盡遣僧

出赴道場輅乃潛開其僧房搜得一穴通佛

座下即由穴入佛身厲聲歷數諸僧過惡術

將遂擒其魁高祖命就彼戮之以輅為長河

縣主簿

(27才)

鄭克曰按此亦以矯妄幻惑而戮之也

棠陰比事卷上

(一行あき)

棠陰比事卷中

杜鎬毀像 次翁戮男

議罪

杜鎬侍郎兄任江南為法官嘗有子毀父畫

像為近親所訟者疑其法未能決形於顏色

鎬音浩尚幼聞知其故輒曰僧道毀天尊佛像

可以比也兄甚奇之遂以此為斷見本傳

鄭克曰按荀子言有法者以法行無法者

以類舉此以類舉者也若夫黃霸戮奸男  
蓋舉其事之類耳法不禁禽獸聚麀音麀牝鹿

(28ウ)

(28才)



議罪

也然人殺禽獸無罪則戮之可也

黃霸字次翁漢宣帝時為丞相燕代之間有三男共娶一女因生二子乃欲分離各爭其子遂訟於臺請霸斷之霸曰非同人類當以禽獸處之遂戮其三男以子還母

傳令鞭絲 李惠擊塩

証應

宋傅琰字季珪為山陣令有賣糖賣針兩家老母爭絲一團訴之季珪季珪令掛絲於柱鞭之有少鐵屑焉乃罰賣糖者出南史本傳後魏李惠仕為雍州刺史有負薪負塩者爭一羊皮各言藉背之物惠謂州吏曰此羊皮可拷知其主羣下嘿然惠令置羊皮於席上以杖擊之見少許塩屑先結切末也使爭者視之負薪者乃伏罪出北史本傳

鄭克曰按傳琰鞭絲事異理同皆以物為證者也

楊牧咎巫 薛向執賈古音

懲惡 後魏李崇為揚州刺史有定州流人解思安背役亡歸其兄慶賓規絕名貫乃認城外死尸詐稱是弟為蘇顯甫李蓋所殺有女巫楊氏託鬼附說思安被害之苦李蓋等不勝其

楚各自歎服崇疑其非實乃遣二人偽從外來詣慶賓曰某住在北州有一人夜過寄宿云是流兵背役人解思安欲送之官苦求見免且謂有兄慶賓見住揚州君脫矜憫為住

(1才)

告報須重相酬今但見質若往不獲送官未晚慶賓悵然失色求其少停此人具以報崇崇乃攝而問之即自引服數日間思安亦為人縛至崇答女巫一百遂釋蓋等出北史本傳

鄭克曰按此亦察其面之色歎之辭事之情而疑其誣報者也但用譎鈎懸以驗誣告為異耳然所以給而驗之者欲釋誣物之寃也

(2ウ)

察姦

樞密薛向初為京兆府司戶兼監商稅有賈音胡過稅務出銀二篋書其上曰樞密使遺涇原都監向曰此決偽也安有大臣餉音向人物而使賈胡致之執詣府治之果伏其詐見曰大防所撰墓誌

程戡仇門 仲游帥字

辨誣

程戡宣徽度知州民有積為仇者一日諸子私謂其母曰今母老且病恐不得更壽請以母死報仇乃殺其母置于仇人之門而訴于官仇者不能自明而戡音疑之僚屬皆言理無足疑戡曰殺人而自置于門非可疑耶乃親劾治具得本謀出王珪所撰墓誌

辨誣

畢仲游為河東提刑丞相韓縝音出鎮太原其家奴胡童自陳有卒剽劫其衣服於黃堂之側公怒以付吏將黥配之仲游謂小童衣服鮮薄而剽匹妙切掠於大帥故相之字下似非人情易吏按治其誣乃辨見陳恬所作墓誌

(3才)

鄭克曰按誣有難知者有易知者智不足

則有所惑而於難知者不能辨矣勇不足

則有所懼而於易知者不敢辨矣苟不能

辨亦奚足責若不敢辨斯實可罪孟陽之

鞫賊不同中丞意仲游之案劫不避大帥

怒皆所謂勇於義者也

符融沐枕 獄吏滌音參洗也屨

釋寃

前秦符融字傳林為司隸校尉善斷獄京兆

董豐游學三年而歸宿妻家是夜妻為人所

殺妻兄訴豐殺之不勝楚掠遂自誣服融疑

而問曰汝行往還頗有怪異及卜筮否豐言

嘗夢乘馬入一水自北而南俯見兩日在水

中又馬左向濕寤而心悸其季切筮者云憂

獄訟遠三枕避三沐既至妻為具沐夜授豐

枕憶筮者言而皆拒之妻乃自沐以其枕眠

融曰在易坎為水為北離為馬為南馬北渡

從北而南從坎之離三爻同變離為中女坎

為中男馬左向而濕水也左水右馬馮字兩

日昌字其馮昌殺之乎推驗獲昌詰之具服

與豐妻奸故謀殺豐誤中婦人出晉載記本傳

鄭克曰按古之察獄亦多術矣卜筮怪異

皆盡心焉至誠哀矜必獲冥助是以馮昌

之罪具明而董豐之寃得釋也

覈姦

江南大理寺嘗鞫殺人獄未得其實獄吏日

夜憂懼乃焚香懇口狼切禱以求神助因夢

(3ウ)

過枯河上高山瘡而思之曰河無水乃可字

山而高乃嵩字可嵩僧名也或言崇孝寺有

僧名可嵩乃白長官下符攝之既至訊問亦

無奸狀忽見屨履遇切上有墨污因問其由

云墨所濺使脫視之乃墨塗也復詰之僧色

動遂滌去其墨即見血痕以此鞫之僧乃服

罪見吳叔校理秘閣閑談

鄭克曰按可嵩事與馮昌類矣然未見奸

狀時若不着血污之屨將何以覈其奸乎

蓋獲冥助如蕭儼禱神而雷震牛死非智

筭所及也和凝嘗曰潔誠齋戒折獲祐於

上穹銳意典墳思有得於邃邃切深邃切遠邃切也古兼

此二者用以折獄諒無難矣

宗裔卷音教 高防校音教 布

證厯 王蜀時有許宗裔守劍州部民被盜燈下識

之迨曉告官捕獲一人所收贖物惟絲絢音絢

釋寃 絲絢而己宗裔引問縲囚訴寃稱是本

家物與被盜人互有詞說乃命取兩家縲絲

車以絲絢量其大小與囚家車軛音軛同

又問絢執卷時胎心用何物一云杏核一云

瓦子因令相對開示之見杏核與囚款同於

是被盜人服妄認之罪巡捕吏當拷決之辜

指顧之間便雪寃枉

釋寃 周世宗時高防知蔡州部民王義為賊所劫

捕得五人擊獄窮治贓仗已具將加極刑防

(5ウ)

(4才)

此二者用以折獄諒無難矣

宗裔卷音教 高防校音教 布

證厯 王蜀時有許宗裔守劍州部民被盜燈下識

之迨曉告官捕獲一人所收贖物惟絲絢音絢

釋寃 絲絢而己宗裔引問縲囚訴寃稱是本

家物與被盜人互有詞說乃命取兩家縲絲

車以絲絢量其大小與囚家車軛音軛同

又問絢執卷時胎心用何物一云杏核一云

瓦子因令相對開示之見杏核與囚款同於

是被盜人服妄認之罪巡捕吏當拷決之辜

指顧之間便雪寃枉

釋寃 周世宗時高防知蔡州部民王義為賊所劫

捕得五人擊獄窮治贓仗已具將加極刑防

(4ウ)

此二者用以折獄諒無難矣

宗裔卷音教 高防校音教 布

證厯 王蜀時有許宗裔守劍州部民被盜燈下識

之迨曉告官捕獲一人所收贖物惟絲絢音絢

釋寃 絲絢而己宗裔引問縲囚訴寃稱是本

家物與被盜人互有詞說乃命取兩家縲絲

車以絲絢量其大小與囚家車軛音軛同

疑其任取贓閱之召義問所失衫袴是一端」  
布否曰然防令校其幅尺廣狹疎密不同因  
乃稱寃問何故服罪曰不任捶楚求速死耳  
居數日獲本賊而五人乃免防歸本朝終於  
尚書左丞見本傳

鄭克曰按防校布事與許宗裔驗贓術同  
然所獲衫袴本非真贓若其不幸而疎密  
廣狹如一則奈何苟於情理有可疑者雖  
贓證符合亦未宜遽決雍熙中邵晔爲軋切  
諫議為蓬州錄事參軍知州楊全性率而  
悍音汗也部民十三人被誣為劫盜悉質于

大辟晔察其枉曰講再劾不聽乃取二人  
棄市餘械送闕下次日果得正賊全坐削  
籍為民晔賜緋魚袋授光祿寺丞景德中  
梁顥內翰知開封府時開封縣尉張易捕  
盜八人獄成坐流既決乃獲真盜御史臺  
劾問得實官吏皆坐貶責此乃但馮憑證  
不察情理而遽決之者也蓋贓或非真證  
或非實惟以情理察之然後不致枉濫可  
不謹哉

江分表裏 章辨朱墨

察姦 陵州仁壽縣有里胥洪氏利鄰人田給音始  
之曰我為若稅免若役鄰人喜割其稅歸之  
名於洪氏踰二十年且偽為券契約也券以  
茶染紙類遠年者訟之于縣縣令江某郎中

(6才)

察姦

取紙積伸之曰若遠年紙裏當色白今表裏  
如一偽也訊之果服江乃衢州開化人今失  
其名事見李泰伯主簿  
墓誌  
所撰  
侍御章頻知彭州九隴縣時眉州大姓孫延  
世為偽契奪族人田久不能辨轉運使委頻  
驗治頻曰券墨浮朱上決先盜用印而後書  
之既引伏獄朱上而其家人復訴于轉運使  
更命知益州華陽縣黃夢松覆案亦無所異  
黃用此召為監察御史頻乃坐不即具獄  
州監酒見本傳頻卒于道  
二年使虜卒于道

(6ウ)

故質集鄰 高柔察色

鄭克曰按偽券之姦世多有之巧詐百端  
不可勝察著以二事亦足以鑒也  
察應 魏胡質字文德為常山太守東莞音官魯  
鄆邑名士  
盧顯為人所殺求賊未得質曰此士無讎而  
有少妻所以死乎悉集其鄰居少年有書吏  
李若者見質而色動遂窮詰情狀若郎自首  
伏罪出本  
傳

(8才)

(7才)

鄭克曰按高柔知寶禮無讎而與人交錢  
物所以死也故察得焦子文胡質知盧顯  
無讎而有少妻所以死也故察得李若夫  
人之相殺害者苟無讎恨若不因財則是  
因色推此二者足以得其人矣然所以察  
之者皆不過色與辭之間亦惟聰明故不  
可欺也

(7ウ)

察惡

魏高柔為廷尉護軍營士竇禮近出不還營

(8ウ)

以為没身其妻盈氏及男女稱冤自訟莫有  
省者乃詣廷尉柔問何以知夫亡盈氏泣對

曰夫非輕狡古巧切不顧室家者又問汝夫

不與人有讎乎曰夫良善與人無讎汝夫不

與人交錢物乎曰嘗出錢與同營焦子文求

不得時子文適坐事繫獄柔乃召問所坐語

次問曾舉人錢否對曰單貧不敢舉人錢察

其色動遂復問汝曾舉竇禮錢何言否耶子

文怪知事露應對不次柔詰之曰汝已殺竇

禮便宜早服子文於是叩頭服罪出本傳

(9ウ)

鄭克曰按音惡惡也與奸異者奸必巧詐惡

唯隱諱如釘殺其夫而云遭火燒死是巧

詐也如舉竇禮錢而云單貧不敢是隱諱

也禮近出不還疑為人所殺故首問其隱

次問交錢物者嘗出錢與焦子文而求不

得或緣嫌恨以致此禍於是察其色動辭

對不次則隱諱之情得矣故詰之服罪是

善察惡者也

蔣常胡嫗 思彥集兒

唐貞觀中衛州板橋店主張逖妻歸寧有魏

州王衛楊正等三人投店宿五更早發夜有

人取王衛刀殺逖踏其刀却內納鞘中正等

不知覺也至明店人趨正等拔刀血甚狼籍

囚禁正等拷訊苦痛遂自誣服上疑之差御

(9ウ)

史蔣常復推至則綵追店人年十五以上者

集為人數不足且放散唯留一老嫗年八十

餘日晚放出令典獄密覘之曰嫗出當有人

共語者即記姓名勿令漏泄果有一人即記

之明日復爾其人又問嫗云使人作何推問

如是三日並是此人因綵集男女三百餘人

就中喚出與老嫗語者餘並放散問之具伏

云與逖妻奸殺逖其實奏之勅賜常綵二百

區遮侍御史

鄭克曰按李崇用譎鈞惡蔣常用譎察賊

而皆能釋冤斯無惡於譎矣

唐韓思彥使并州有賊殺人主名不立醉胡

懷刀而汗訊掠已伏思彥疑之晨集童兒凡

數百暮乃出之如是者三因問兒出亦有問

之者乎皆曰有之即物色其人而訊之於是

果獲真盜見唐書本傳

鄭克曰按此亦用譎獲賊而冤乃釋但不

若蔣常獨留一嫗密覘問者為精密耳

劉相鄰證 韓參乳醫

丞相劉沆知衛州日有大姓尹氏欲買鄰人

田莫能得鄰人老而子幼乃偽為券及鄰人

死即逐其子訟二十年不得直沆至又訴尹

氏出積歲所取戶鈔為驗沆下黨詰之曰若

田百頃戶鈔豈特取此乎始為券時嘗問鄰

乎其人固多在可取為證尹氏不能對遂伏

(10ウ)

(10ウ)

罪見本傳

證愿

鄭克曰按賈田問鄰成券會鄰古法也使當時法不存則將何以覈其姦乎近年有司苟取小快遂改此法未之思歟

參政韓億知洋州時土豪李甲者兄死迫嫁其嫂因誣其子為異姓以專其貲嫂歷訴于官甲輒賂吏使掠服之積十餘年其訴不已億視舊牘但未嘗引乳醫為證一日盡召其黨以乳醫視之衆乃無辭其寃遂白見本傳

鄭克曰按昔人嘗云推事有兩一察情一

據證固當兼用之也然證有難憑者則不

若察情可以中其肺腑之隱情有難見者則不若據證可以屈其口舌之爭兩者迭用各適其宜也彼誣其子為他姓者所引之證想亦非一獨未嘗引乳醫則其情可見矣故盡召其黨以乳醫示之既有以中其肺腑之隱又有以屈其口舌之爭則衆無以為辭而寃遂辨不亦宜乎

袁滋鑄金 孫寶秤散

釋寃

唐李沔公勉鎮鳳翔有屬邑耕夫因耦奴豆耕田得馬蹄金一瓮送縣為令者慮公藏主

守不謹而寃之私室翌音戈明日開視之則

皆土塊耳以狀聞府遣掾案之不能自明誣服換金初云藏之糞土被人竊去後云投之水

(11才)

(11ウ)

(12才)

換金無疑矣府中宴集語及此事咸共嗟嘆

時袁滋在幕府獨俛首無語沔公詰之滋曰

某疑此事有枉勉乃移獄就府俾滋鞠實滋

閱甕間得二百五十餘塊詰其初獲者則二

農夫以巨竹舁音余對至縣乃於別肆索金

依土塊形狀鎔瀉校量始秤其半已及三百

斤計其總數非二人以竹檐可舉即是在路

之時金已化為土矣於是羣情大豁邑宰獲

雪 出唐耕劇談錄 又見唐書本傳

證愿

漢孫寶為京兆尹有賣饃散者今之饃餅也

偶與村民相逢於都市擊落饃餅盡碎民認

填五十枚賣者堅言三百枚因致喧爭至太

守之前引問無以證明寶令別買饃餅一枚

秤見分兩乃都秤碎者紐折立見元數衆皆

嘆服賣者乃服虛誑之罪

鄭克曰按魏太祖時孫權致巨象欲知其

斤重訪之羣下莫能出其理鄧哀王冲方

數歲請置象大船之上刻水痕所至而秤

物以載之校可知也與秤饃散擊上之理同

矣寶以饃散一枚之重校碎者之重而枚

數立見冲以載象所至之痕校秤物之痕

而斤重可知皆其智有餘也夫片言可以

折獄者何其為人信服至於如此哉蓋以

智有餘而言中理故爾欺誑之愿以此為

證而不可諱矣彼焉得不服耶是故片言

(12ウ)

(13才)

可以折獄也

程簿舊錢 王故據簡

證愿

程顥察院初為京兆府鄆音戶縣名縣主簿民有

借兄之宅居者發地中藏錢兄之子訴曰父

所藏也令言無證佐何以決之顥音浩曰此易

辨耳問兄之子曰爾父藏錢幾年矣曰二十

年遣吏取一千視之謂曰今官所鑄不五六

年則徧天下此錢乃爾父未居前數十年所

鑄何也其人遂伏 見程伊川所撰行狀

鄭克曰按旁求證佐或有偽也直取錢驗

斯為實矣彼言地中藏錢是其父所藏者

取錢驗之皆古錢也又豈能選擇古錢藏

之耶以此為證妄訴明矣是故其人不取

不服也

寺丞王璩音渠嘗為襄州中盧令有賊人久訊

不得情偶於賊橐于他各切詩中得故簡而揭

示之乃房陵商人道為賊所掠者賊即引伏

不爾幾脫見王註撰墓誌所

鄭克曰按此非智筭所及偶然得之耳亦

可見璩之治獄能盡其心獄之鞫情有賴

於證也歐陽暉以右肋之傷為證而毆殺

者辭窮王璩以橐中之簡為證而劫掠者

情得證愿之術焉可忽諸

(13ウ)

境尤甚有齊衰者哭且獻狀曰遷三世十二

喪于武昌為津吏所遇公綽即命軍候換其

人破其柩音舊皆實以稻米蓋葬於歎歲不

應併舉三世十二喪故知其詐耳

鄭克曰按此雖非劫取者而與元膺搜擷

事頗相類也然議者謂以閉權非美不足

為法今但取其明察慮有他姦故著為察

賊之鑿耳

(14才)

察賊

唐呂元膺字景夫鎮岳陽因出遊賞乃登高

阜音濫切視原野忽見有喪輿駐道左男

子五人衰服而隨公曰遠葬則次近葬則省

此決奸黨為詐也因令左右搜索之棺中皆

兵刃乃曰欲謀過江掠貨故假為喪輿使渡

我者不疑耳公劾之更有同黨數十已期

集於彼岸併擒以付法

柳寃瘖奴 王扣音口狂嫗

釋寃 唐柳渾為江西觀察使判官僧有夜飲火其

廬者歸罪瘖奴軍候受財不詰獄具渾與其

僚崔祐甫白奴寃於觀察使魏少游趣訊其

僧僧乃首伏 見唐書柳渾本傳

鄭克曰按僧飲酒失火二罪俱發而謂失

火者瘖奴耳且掩其飲酒之迹也若非軍

候受財不詰則此獄豈難辨乎惟上下相

(15ウ)

蒙不以獄事為意故莫之辨耳渾與祐甫

一代英賢而白其寃少游能聽用之故趣

公綽破柩 元膺擒擷音預

車也

察賊 柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

柳氏叙訓云柳公綽為襄陽節度使歲險鄰

訊僧云斯亦可稱也

釋寃

大卿王罕知潭州時有狂嫗數邀知州訴事言無倫理從騎多屏逐之罕至復出訴左右欲逐之罕乃令引歸聽事叩堵徐問嫗雖言語雜亂然時有可采者乃其始為人嫡妻無子其妾有子夫死為妾所逐家貲妾盡據之累訴不直因恚於睡切恨怒也而狂罕為直其事盡以家貲與之見涑水記聞

李公驗擗音舉即擗柳也 王臻辨葛

證歷

尚書李南公知長沙縣時有鬪者甲強而乙弱各有青赤痕南公召使前以自指捏之曰「乙真而甲偽也訊之果然蓋南方有擗柳以葉塗肌膚則青赤如毆傷者剝其皮橫置膚上以火熨之則如楛也亦作擗傷者水洗不落但毆傷者血聚則硬而偽者不然南公乃以此辨之也聞之士林

鄭克曰按鬪毆之訟以傷為證而有此偽豈可不辨故特著焉

辨誣

王諫議知福州時閩音民東南越種人欲報仇或先食野葛而後鬪即死其家遂誣告之臻問所傷果致命耶吏曰傷無甚也臻以為疑反訊告者乃得其實見本傳

鄭克曰按賈昌齡少卿初為饒州浮梁尉其俗輕死與人有怨往往先食野葛以誣怨者昌齡輒能辨究之與臻問傷類矣是

(16才)

皆深察者也

察盜 孫料兄殺

察奸

顯知子盜 孫料兄殺 郎中歐陽顯知歛許及州富家有盜啓其藏捕久不獲有司苦之顯曰勿捕獨召富家二子械付獄劾之即伏吏民初疑不勝楚掠而自誣及取其所盜物乃信見歐陽脩所撰墓誌 孫長卿侍郎知和州民有訴弟為人所殺者察其言不情乃問汝戶幾等曰上等也汝家幾人曰唯一弟與妻子耳長卿曰殺弟者兄也豈將併有質乎按之果然矣撰墓誌 鄭克曰按奸人之匿情作偽者或聽其聲而不知之或視其色而知之或詰其辭而知之或訊其事而知之蓋以此四者得其情矣故奸偽之人莫能欺也然苟非明於察奸之術則亦焉能與於此哉

(16ウ)

(17ウ)

議罪

郭躬明誤 希亮救亡

後漢郭躬以郡吏辟公府時有兄弟共殺人者而罪未有所歸明帝以兄不訓弟故報兄重而減弟死中常侍孫章宣詔誤言兩報重尚書奏章矯制罪當腰斬帝以躬明法律召入問之躬對章應罰金帝曰章矯詔殺人何謂罰金躬曰法令有故誤章傳命之謬於事為誤誤者其文則輕帝曰因與章同縣疑其故也躬曰周道如砥音紙平均也其直如矢君子不逆詐帝王法天刑不可委曲生意帝稱善

(18才)

遷躬廷尉正出後漢本傳

鄭克曰按深文峻法務為苛寒歌切刻者

皆委曲生意而然也君子不逆詐蓋惡其

末流決至於此爾傳稱躬之典理官也決

獄斷刑依於矜恕故世傳法律而子孫至

公者一人廷尉七人侯者三人二千石侍

中郎將者二十餘人侍御史正監平者甚

衆積善之慶不其甚歟

議罪

陳希亮大卿為開封府司錄時有青州男子趙宇上言元昊決反坐責為文學參軍福州

安置明年果反宇自訟而所部不受亡至京

師執政令劾以在官無故去法希亮奏乞以

宇所上封事付有司即其言驗不當加責由

是得釋見本傳

鄭克曰按此論其狀則宇為文學參軍福

州安置而亡至京師劾以在官無故亡法

可也論其情則宇豈無故亡哉本坐言元

昊反而責之今果反矣尚何劾焉希亮可

謂能捨狀以探情也

商原詐服 寶阻免喪

議罪

晉商仲堪為荊州牧有桂陽人黃欽生二親

久没詐服練麻言迎父喪府曹依律棄市商

曰原此法意當以二親生存而橫言死没情

事悖逆所不忍言固當棄市今欽生父母終

没此特誕妄之過遂免死出晉書

(18ウ)

議罪

唐賈參初為奉先尉男子曹芬兄弟隸北軍

醉暴其妹父救不止恚於睡切恨怒也赴井死參當

兄弟重辟衆請侯免喪參曰父由于死若以

喪延是殺父不坐皆榜殺之出唐書本傳

鄭克曰按唐制縣令許決死罪參為尉時

殆攝行令事歟北軍之衆屯於奉先請為

其父持喪以緩其刑蓋欲賂中官以倖免

耳參駁正其說而亟決之乃為此也

薛絹互爭 符盜並走

前漢時臨淮有一人持縑入市值雨以縑披

覆後一人至求庇蔭持與縑一頭雨霽當

別因互爭縑共訴於太守薛宜宣乃呼騎吏

斷縑各與其半使追聽之後人曰太守之賜

其縑主乃稱冤不已宣知其狀詰之伏罪薛宜宣

鄭克曰按此與黃霸抱兒之術同也薛宜

用於斷所爭之絹于仲文用於傷所認之

牛以其事異而理同故爾後有善撻姦者

則霸之術猶可用也

辨誣 前秦符融為冀州牧有一老母日暮遇劫盜

行人為母逐之擒盜盜反誣行人符融曰二

(19ウ)

(20ウ)

(20才)



人並走先出奉陽門者非盜既還融正色謂

(21才)

後至者汝即盜也其發奸擿伏如此蓋融性

明察能懸料其事以為盜若善走則決不被

行人所獲以此測之善走者是捕逐人也晉出

載記本傳

鄭克曰按薛顏大卿知江寧府邏者晝劫

人反執平人以告顏視其色動叱昌栗切

曰爾盜也械之果服頗亦類此蓋辨誣之

術惟博聞深察不可欺惑乃能精焉丙吉

所謂博聞也孫亮所謂深察也符融驗走

而得其實薛顏視色而得其情皆可謂察

之深而辨之明矣

蕭儼疑檢切震牛 懷武用狗

釋冤

南唐昇元格盜物及三緡者死廬陵豪民曝

薄報切日衣失新潔衾服直數十千村落僻

遠人罕經行以為其鄰盜之鄰人不勝楚掠

遂自誣服詰其贖物即云散鬻於市無從追

究赴法之日冤聲動人長吏以聞先主命員

外郎蕭儼覆之儼齋戒禱神佇雪冤枉至郡

之日天氣晴和忽有雷雨自西北起至失物

家震死一牛剖其腹而得所失物乃是為牛

所噉徒濫切猶未消潰也出鄭文寶南唐近

鄭克曰按此非智筭所及蓋獲冥助爾實

至誠哀矜之效也 王蜀時有蕭懷武者主尋事團乃軍巡之職

懲惡

辨誣

唐張鸞音為河陽尉有呂元偽作倉督馮忱

書盜糶倉粟忱不認而元執之堅張乃取元

告牒括兩頭唯留一字問元是汝書即云是

不是即云非元曰非去括即是元告牒先決

五十又括古括切包四邊而空其中詐為馮忱詩任

二字以問之元乃曰是及去括即詐書也元

於是服罪

鄭克曰按鸞蓋已知其誣而欲使之服故

括字以覈其奸問書以證其愚斯不可隱

諱矣亦安得不服乎

覈奸

侍郎簡知寶州有椽吏死子幼贅以丙切

錢堵偽為券取其田後子長屢訴不得直因

訴于朝下簡劾治簡以舊案示之曰此爾婦

翁書耶曰然又取偽券示之弗類婿乃伏罪

鄭克曰按此所以覈其奸者以舊案校偽

族誅之是使察奸慝而反為好慝者也見成

記令

文成括書 郎簡校券

唐張鸞音為河陽尉有呂元偽作倉督馮忱

書盜糶倉粟忱不認而元執之堅張乃取元

告牒括兩頭唯留一字問元是汝書即云是

不是即云非元曰非去括即是元告牒先決

五十又括古括切包四邊而空其中詐為馮忱詩任

二字以問之元乃曰是及去括即詐書也元

於是服罪

鄭克曰按鸞蓋已知其誣而欲使之服故

括字以覈其奸問書以證其愚斯不可隱

諱矣亦安得不服乎

覈奸

侍郎簡知寶州有椽吏死子幼贅以丙切

錢堵偽為券取其田後子長屢訴不得直因

訴于朝下簡劾治簡以舊案示之曰此爾婦

翁書耶曰然又取偽券示之弗類婿乃伏罪

鄭克曰按此所以覈其奸者以舊案校偽

(22ウ)

(23才)

孝肅杖吏 周相收掾命綱切官屬也

察奸

包拯副樞知開封府杖吏號為嚴明有民犯

法罪當杖脊吏受賂與之約曰今見尹必付

我責狀汝第號呼自辨我當與汝分罪汝決

杖我亦決杖既而拯引囚問畢果付吏責狀

因如吏言分辦不已吏大聲呵之曰但受脊

杖出去何用多言拯謂其招權挫吏於庭杖

之十七特寬囚罪止從杖坐公知以此折吏

勢不知乃為所賣也見沈括筆談

鄭克曰按此蓋防其招權不防其見賣也

大抵察奸不可有意吏果招權杖之可矣

矯枉過正遂寬囚罪為彼窺測以至見賣

失在有意折吏之勢也然則善察奸者可

不鑒於此哉

擿奸

後漢周紆字文通為召陵侯相廷掾憚紆嚴

覈奸

明欲損其威乃晨取道傍死人斷其手足立

于寺門紆此紆即音迂字聞便往至死人邊若與死

人共笑語狀陰察視口眼中有稻芒乃密問

守門者曰誰載藁入城對曰唯有廷掾耳又

問鈴下曰外頗有疑吾與死人共笑語有否

對曰廷掾疑君乃收廷掾訊之具服出後漢書

鄭克曰按紆視口眼有稻芒者跡也若與

死人共語者譎也以跡推覈其事以譎發

隨其情乃復密問以相參考而姦人得矣

又曰紆察死人狀而得稻芒音亡草端也焉因

(23ウ)

以求為姦之迹是覈姦者也與死人語而  
使疑怪焉因以動懷姦之心是擿姦者也  
覈姦以正擿姦以譎此其所以異也

方偕主名 宋文墨迹

辨誣

方偕大卿為御史臺推直官日豐州逃卒與  
富民有仇誣以歲殺人十二祭磨斃神獄久

不決詔偕就鞫之偕命告人疏所殺主名尋

訪考驗尚多無恙其事遂白見天聖名臣傳

鄭克曰按王珪丞相撰唐介參政墓誌言

介為岳州沅江令州民李氏鉅有質吏數

類也 以事動之既不厭所求乃言其家

歲殺人祀鬼會知州事孟合喜刻深悉捕

繫李氏家無少長榜笞久莫伏以介治縣

有能名命更訊之介按劾無他狀合怒以

其事聞朝廷詔遣殿中侍御史方偕徒其

獄于豐州已而不異介所劾其後州吏皆

坐罪去偕以活死者得官介終不自言惟

偕使告人具疏主名辨誣之術有足取者

故特著之

鞠情

(24ウ)

宋元嘉二十二年孔熙先與徐湛之許耀謝  
綜范曄謀立彭城王義康湛之上表告狀詔

收綜等並歎服唯曄不首頻詔窮治乃言熙

先苟誣引臣文帝以曄所造及改立符檄刑狄切以木墨迹示之乃服罪 出南史范泰傳曄其子也

陳議掉取 胡爭竊食

(25ウ)

(25才)

(25ウ)

議罪

陳奉古主客通判貝州時有卒執盜者其母

(26才)

欲前取盜卒拒不與仆之地明日死以卒屬

吏論為棄市奉古議曰主盜有亡失法今人

取之法當得捍掉音汗衛也而死乃以鬪論是

守者不得主盜也殘一不辜而為剽奪生事

法非是因以聞報至杖卒人稱服之見王向主簿所

誌

鄭克曰按古之議罪者先正名分次原情

理彼欲前取者被執之盜也母雖親不得

輒取也此拒不與者執盜之主也卒雖弱

不得輒與也前取之情在於奪不與之情

在於捍奪而捍焉其狀似鬪而實非鬪若

以鬪論是不正名分不原情理也奉古謂

法非是不曰法當得捍乎奈何歸咎於法

蓋用法者謬耳

胡向少卿初為袁州司理參軍有人竊食而

主者擊殺之郡論以死向爭之曰法當杖郡

將不聽至請于朝乃如向議見撰墓誌

鄭克曰以名分言之則被擊者竊食之盜

也擊之者典食之主也以情理言之則與

凡人相毆異矣登時擊殺罪不至死可也

然須擊者本無殺意邂逅致死乃坐杖罪

或用刃或絕時或殘毀則是意在於殺法

所不許也又當原其情理豈可一概科斷

(27才)

(三行あき)

棠陰比事卷中

(二行あき)

棠陰比事卷下

御史朱狀 國淵求牋

辨誣

唐高祖以李靖為岐州刺史或有一人

希望聖旨告靖謀反者高祖命一御史往按

之謂曰李靖反狀實便可處分御史知其誣

罔請與告事者偕行行數驛御史伴云失告

狀驚懼異常乃祈告事者曰李靖反狀分明

親奉聖旨今失告狀幸救其命告事者乃別

疏一狀與御史驗其狀乃與元狀不同即日

還京以聞高祖高祖大驚靖得不坐罪告事

者伏誅失御史名

鄭克曰按辨誣之術有正有謫李崇疑其

誣也故謫以求情御史知其誣也故謫以

取質苟非盡心者則亦豈能精耶

魏國淵守子尼為魏郡太守時正直無私有

投書誹音誹謗音謗議音議太祖者太祖疾之心欲知其

主名淵請留其本書而不宜露書中多引二

京賦乃勅功曹曰此郡既大今在都輦而少

學其簡開解少年欲遣就師功曹差三人

臨遣引見訓以所學未及二京賦此博物之

(1ウ)

(27ウ)

(1才)

方其書似出一手收問服罪出魏志本傳

鄭克曰按王安禮右丞知開封府時或投書告一富家有逆謀都城稍恐安禮不以為然後數日有旨根治搜驗富家事皆無跡因問會與誰為仇對以數月前鬻音育狀馬生者有所貸而弗與頗積怨言於是密以他事攝馬生至對款取匿名書較之字無少異訊鞫引伏此乃用淵藪奸之術也

(2才)

偉冒苑祚音 虔傲鄧賢

嚴明 劉敞侍讀知永興軍時大姓范偉冒武功令祚為祖偉乃穿祚墓以己祖母音附音葬音合音之規避徭役者五十年數犯法至徒流輒以贖免長安人共患苦之然吏莫敢誰何敞按其事獄未具而召由是辭屢變證逮數百人獄連年不決詔取付御史臺驗治卒如敞所發出本傳

(2ウ)

鄭克曰按范偉之橫人患苦之然敞按其冒蔭避役證逮數百人連年不決者何也彼於黨與結之厚矣乃敢爾也證逮之人其黨與也豈易鞫哉且長安人共患苦之然吏莫敢治則桀黠胡八切可知也非按者嚴明不能發其事非鞫者嚴明不能得其實是故奸民多幸免也獄辭屢變蓋以此歟

嚴明

沈括筆談云江南人好訟有一書名鄧思賢皆訟牒法也其始則教以侮文侮文不可得則欺誣以取之欺誣不可得則求其罪以劫之鄧思賢人名也始傳此術遂名其書凡村校中往往以此授生徒見筆韓琚音居音可音封通判處州日民有偽作冤狀悲憤房粉切嗚呼似若可信者會守閩瑠偶攝郡究其風俗考其枉直其下莫之能欺辭伏者皆自以為不冤琚乃魏公琦之兄也終於兩浙轉運使尹墓誌

(3才)

次武各驢 憲之俱解

鄭克曰然則琚所以究其風俗考其枉直者豈特下莫能欺蓋亦人不可劫不可劫所以為嚴也莫能欺所以為明也彼其辭伏者自以為不冤非此故欺

(3ウ)

擿奸

周于仲文字次武為趙王屬安固太守有任杜兩家各失牛後得一牛兩家爭之州郡不能決益州長史韓伯携曰于安固少年聽察可令決之仲文乃令兩家各驅牛羣到及放所得一牛遂入任氏羣又使人微傷其牛任氏嗟惋其腕驚杜氏自若杜即服罪出北史傳仲文其世孫也

(4才)

鄭克曰此亦用霸擿姦之術者也隋襄州總管裴政云凡推事有兩一察情一據證審其曲直以定是非據證者覈姦用之察

證憲

情者擿姦用之蓋證或難憑而情亦難見於是用譎以適其伏然後得之

宋顧憲之為建康令時有盜牛者與本主爭牛各言已物二家辭證等前後令莫能決憲之至覆其狀乃令解牛任其所去牛徑還本家盜者始伏其罪出南史顧凱之傳憲之其孫也

鄭克曰按證以人或容偽焉故前後令莫能決證以物必得實焉故盜者始服其罪

于仲文放牛事與此正相類其異者彼之家遠而有牛羣此之家近而無牛羣也隨事制宜然後放之理無異焉

張昇窺井 蔡高宿海

察奸

張昇音抔丞相知潤州有婦人夫出數日不歸

忽聞菜園井中有死人即往哭之曰吾夫也

以聞于官昇命屬吏集鄰里就其井驗是其夫否皆言井深不可辨請出其尸驗之昇曰

衆皆不能辨而婦人獨知其為夫何耶收付所司訊問乃奸人殺之而婦人與聞其謀也

見沈括筆談

釋冤

蔡高為福州長溪尉縣媼二子漁於海而亡

媼指某氏為仇告縣捕賊吏難之曰海有風

波安知其不水死乎果為仇所殺若不得尸

於法不可理高獨謂媼色有冤不可不理乃

陰察仇家得其迹與媼約曰期十日不得尸則為媼受捕賊之責凡宿海上七日潮浮二

尸到驗之皆殺也乃捕仇家鞫之而伏法高囊之弟事見歐公所撰墓誌

鄭克曰按人之冤訴苦於抑塞謂不得尸則不可理者豈非抑塞乎夫尉以捕賊為職苟不恤冤訴事不勤職業豈疾惡慕義之士所為乎雖然高受而理之亦有以也

吏患不得尸而尸在海者皆隨潮出第恐不幸潮落他境耳故與媼約曰期十日不得尸則為媼受捕賊之責宿海上七日而潮浮二尸至此其至誠動恤之效也俗吏

所患何足慮哉是以卒能伸冤也

劉湜焚尸 高防劾病

懲惡

劉待制初知耀州富平縣有盜掠人子女者

既擒獲輒詐死伺間即逸去再捕得復然湜音禎令焚之見本傳

鄭克曰按因其詐死遂以為實而即埋之亦足以折姦而懲惡矣何必焚之耶將慮其徒或能掘取而復活耶掠人子女之罪於法不至戮尸若晝時埋之且使人守之

其徒亦何能為耶雖盜善伏氣而土必塞鼻數日之後與焚之等矣雖不焚可也

議罪

高防初仕周為刑部郎中宿州有民剽側史殺之刃其妻而妻族受賂套州言病風狂不

語並不拷掠以具獄上請大理斷令決杖防覆之云某人病風不語醫工未有驗狀憑何

(5ウ)

(4ウ)

(6才)

(5才)

(6ウ)

取證便坐杖刑况禁繫旬月豈不呼索飲食再劾其事須見本情周祖然之終實于法

鄭克曰按折獄之道必先鞠情而後議罪今情猶未得罪輒先斷於理可乎此蓋受

賂欲庇音嬰之耳是故防之覆議如此然

但請再劾其事不復推究所司則雖疾惡而亦矜頑且慮枝蔓也

王鏐匿名 至遠憶姓

嚴明

唐王鏐為淮南節度使有遺匿名書於前者左右取以授鏐五各鏐納之靴中先以他書

雜之吏退鏐探取他書焚之人謂其皆焚之

矣既而歸省所告異日以他事連所告者禁

繫按驗以誦其衆號稱神明云出唐書本傳

鄭克曰按南齊豫章王嶷魚力切不樂聞人

過失左右投書相告置鞞中竟不視取焚

之鏐蓋樂聞人過失者則其誦也不若疑

之正也

察奸

唐李至遠為天官侍郎知選事嫉令史受賕音求以財物多所黜易吏亦斂手有王忠者

被放而吏乃謬書士姓欲擬訖增成之至遠

曰調者三萬人無土姓者此決王忠也吏叩

頭服罪出唐書李羣玉傳至遠其孫也

嚴明

希崇並付 齊賢兩易

晉張希崇鎮邠州有民與郭氏為義子自孩

提以至成人後因戾不受訓遣之郭氏夫婦

(7才)

相繼俱死有嫡子已長郭氏諸親教義子訟

云是親子欲分其財前後數政不能決希崇

覽其訴判曰父在已離母死不至雖云假子

辜二十年養育之恩儼是親兒犯三千條悖

逆之罪其為傷害名教豈敢理認田園其生

涯盡付嫡子所有訟者與其朋黨委法官以

律定刑聞者皆服

鄭克曰按唐制選人試判三條辭理恆當

決斷明白乃為合格謂之拔萃音碎也希崇

之判蓋本於此惟其恆當明白是以聞者

皆服也

嚴明

張齊賢丞相在中書咸里有爭分財不均者

又因入官訴於上前更十餘斷不服齊賢曰

此非臺省所能決臣請自治之一日坐中書

堂召訟者問曰汝非以彼所分財少乎皆曰

然即命各責狀結實因遣兩吏趣徒其家令

甲入乙舍乙入甲舍貨財皆按堵如故文書

則交易之訟者乃正出涑水記聞

鄭克曰按曾肇音兆撰王延禧朝議墓誌云

延禧任岳州沅江令時有兄弟分財弟弱

所得田下訴不均詰其兄曰均矣即令二

人以此所得更取之兄訴于州州守笑曰此

張齊賢丞相斷獄法也豈彼所聞異乎

釋寃 少卿王珣知昭州日有告偽為州印者獄久

王珣相倫切辨印 尹洙檢籍

(8才)

(8ウ)

(9才)

不決吏持以印文不類及珣索景德已前舊牘視其印文則無少異誣者乃服蓋所印文書乃景德時事固當索景德舊牘校之吏不

出王珣撰墓誌

鄭克曰按此非告者造誣也但見其不類而告之耳所印文書景德時事當索景德以前舊牘校之吏不思此乃今久繫亦可憐哉惟珣盡心於是獲釋不然則必冤死矣

(9ウ)

覈姦

龍圖尹洙音殊當知河南府伊陽縣有女幼孤

而冒賀氏產者鄰人證其非是而沒之官後鄰人死女復訴且請所沒產久不能決洙問女年幾何曰三十二乃檢咸平年籍二年賀氏死而以妻劉為戶詰之曰若五年始生安得有賀氏耶女遂服見本傳

孫登比彈 德裕模金

釋寃

吳太子孫登嘗乘馬出有彈丸飛過令左右求之適見一人操彈佩丸咸以為是辭對不服從者欲搖之登不聽使求所過彈音丸此上聲並也校也之非類乃見釋出吳志本傳

(10才)

鄭克曰按人之負寃多因疑似聽者受辭不能審慎忿然作威遂致枉濫此事雖小可以喻大

辨誣

唐李德裕鎮浙西有甘露寺主僧訴交割常住物被前知事僧隱沒金若干兩引前數輩

為證遞相交付文籍在焉新受代者已伏盜

取之罪未窮破用之所德裕疑其非實償乃

訴寃曰居寺者樂於知事積年以來空交分

兩文書其實無金矣衆人以某孤立不狎流

輩欲乘此擠之因流涕德裕惻然曰此不難

知也乃以兜子數乘命關連僧入對坐兜子

中門皆面壁不得相見各與黃泥令模前後

交付下次金形狀以憑證據僧既不知形狀

各模不同於是劾其誣罔一一伏罪

梁適重去聲 莊助切 袁家惡去聲 滯

譏罪

丞相梁適為審刑院詳議官時梓州妖人白彥歡能依鬼神作法詛呪人有死者獄上請讞皆以不見傷為疑適曰殺人以刃尚或可拒今以詛呪其能免乎卒以重辟論見王珣撰墓誌

(11才)

鄭克曰按能依鬼神作法詛呪是造蓄蠱音古惑也 又腹中虫 毒厭魅音媚 之類也鞫得其實疑不見傷此蓋不知無法者當以類舉之

義耳欲決大獄須傳古義彼俗吏者豈足

語此

有過

南齊袁象為廬陵王諮議參軍王鎮荊州時南郡江陵縣苟將之弟胡之其妻為曾口

寺僧所淫夜入苟家將之殺之為官司所檢

將之列家門穢行欲告則恥忍則不可實已

所殺胡之所列又如此兄弟爭死江陵令啓

(11ウ)

刺史博議象曰將之胡之原心非暴辨(一)之

日義哀行路昔文學引誘獲漏網二子心

皆得免死出南史袁湛傳

鄭克曰按情苟可恕過無大矣孝子之殺

牛義士之隄獄兄弟之爭死皆是也如犯  
夜雖輕罪苟務立威而不原情亦豈能恕  
之此可為有過之鑒也

曹駿坐妻 孔議詈母

議罪

沈存中內翰云壽州有人殺其妻之父母兄  
弟數口州司以為不道緣坐妻子刑曹駁曰  
毆妻之父母即是義絕況於謀殺不當復坐

其妻見筆談

議罪

宋孔深之為尚書比部郎時安陸應城縣人  
張江陵與妻吳共罵母黃令死黃忿恨自縊  
已值赦律子賊殺傷毆父母遇赦猶梟首罵  
詈棄市會赦免刑補治無罵詈致死之科深  
之議曰夫題里逆心仁者不入名且惡之況

乃人事故殺傷呪詛法所不容罵之致盡理

無可有江陵雖遇赦恩固合梟堅堯切斷首

婦子以義愛非天屬黃之所恨意乃在吳原

死補治有失正法詔如深之議吳可棄市深出

之其孫也

鄭克曰詈之致死重於毆傷不以赦原於  
理為允妻若從坐猶或可赦實共罵棄

市亦宜詔所以補議之缺也

孫亮驗蜜 杜亞疑酒

辨誣

吳廢帝孫亮字子明曾暑月游西苑食生梅  
使黃門以銀餅并蓋就中藏吏取蜜黃門素  
怨藏吏乃以鼠屎投蜜中啓言藏吏不謹亮  
即呼吏吏持蜜餅入亮問曰既蓋之復以紙

覆之無緣有此黃門非有求於爾乎吏叩頭  
曰彼嘗從臣覓官席不與亮曰必為此也亦

易知耳乃令破鼠屎觀燥乾也濕則內燥  
而外濕亮曰若鼠屎先在蜜中當內外俱濕

今內燥者乃枉之耳於是黃門即伏其罪出

表等傳

鄭克曰按裴松之以為鼠矢新者亦表裏

皆濕黃門取新矢則無以得其奸緣遇燥

矢或成亮之惠然克謂亮所言者決定之  
理也松之所言者偶合之事也理雖決定

事或偶合故執理以御事亦有時乎不通  
而窒知栗切理之人反為曉事者所笑蓋

以此耳惟珠圓不滯鑑照難欺則事理兼  
明而情狀必得故雜取兩說今復備載其  
本末也

辨誣

唐杜亞鎮維陽有富民父亡未幾奉繼母不  
以道元日上母壽母因賜觴於子既受將飲

乃疑有毒覆於地而地實父物切乃詭語罵  
也母曰以酖殺人上天何祐母拊音撫膺曰

(13才)

(13才)

(12才)

(12才)

(14才)



天鑒在上何當厚誣拊膺不伏執詔公府亞  
詰之曰爾上母壽酒從何來曰長婦執爵而  
致也母賜爾觴又從何來曰亦長婦所執之  
爵也長婦為誰曰此子之婦也亞訶之曰毒  
因婦起奈何誣母遂分於廳側劾之乃是夫  
婦同謀以誣母也遂置之於法

鄭克曰按辨誣之術或以物證其愚李德裕與泥模金是也或以事覈其奸杜亞詰一  
觴勃酖是也此皆其正而不譎者也

傳隆議絕 漢武明繼

議罪

宋文帝時刻以再 縣人黃初妻趙打息載妻

王死後遇赦王有父母及息男稱依法徒趙  
二千里司徒左長史傳隆議曰父子至親分  
形同氣稱之於載即載之於趙雖云三代合  
之一體稱雖創鉅痛深固無離祖之理故古  
人不以父命辭王父命若云稱可殺趙當何  
以處載父子祖孫互相殘戮恐非先王明罰  
阜陶立法之旨也舊令云殺人父母徒二千  
里外不施父子祖孫趙當避王朝功千里外  
耳然令云凡流徙者同籍近親欲相隨聽之  
趙既流移載為人子何得不從載行而稱不  
行豈名教所許趙雖內愧終身稱亦沈痛沒  
齒祖孫之義永不得絕事理固然出南史傳隆其

議罪

漢景帝時廷尉上囚防年繼母陳殺防年父

(14 ㄅ)

防年因殺陳依律殺母以大逆論帝疑之武  
帝時年十二為太子在帝側遂問之對曰夫  
繼母如母明不及母緣父之故比之於母今

繼母無狀手殺其父則下手之日母恩絕矣  
宜與殺人同不宜以大逆論見通典

鄭克曰夫防年得絕其繼母以父故也稱  
不得絕其祖母亦以父故也冤痛之情或  
伸或屈天理存焉法乃因而制之也

戴爭異罰 徐詰緣例

議罪

唐戴胄直又為大理少卿時長孫無忌被召

不解佩刀入東上閣尚書右僕射封德彝夷音

論監門校尉不覺察罪死當無忌贖胄曰校

尉與無忌罪均臣子於君父不得稱誤法著

御湯藥飲食舟船誤不如法皆死陛下錄無

忌功原可之也若罰無忌殺校尉不可謂刑

帝曰法為天下公朕安得阿親戚詔復議德

彝固執帝將可胄駁之曰校尉緣無忌以致

罪法當從輕若皆過誤不當獨死由是無忌

與校尉皆免出唐書本傳

鄭克曰按胄言臣子於君父不得稱誤所

以深責無忌也校尉緣無忌以致罪則與

無忌罪均而法當輕也既色無忌緣以致

罪者豈得不免乎胄之力爭亦忠恕之義

議罪

唐徐有功為司刑丞時有韓純孝者受徐敬

(15 ㄅ)

(16 ㄅ)

業偽官前已物故推事使顧仲琰奏稱家口合緣坐詔依斷籍沒有功議曰律謀反者斬身亡即無斬法若情狀難捨或勅遣戮尸餘非此塗理絕言議緣坐元因處斬無斬豈合相緣既所緣之人亡則所因之罪滅滅止徒坐頻會赦恩今日却斷入官未知據何條例詔依有功議斷放由是獲免籍沒者凡數百家出唐書本傳

鄭克曰按易言聖人南面而聽天下是以漢之史官稱高祖好謀能聽夫聽固人主之職也聽仲琰之奏則數百家被籍沒聽有功之議則數百家免籍沒能於此知取捨亦可謂之明矣有功之脫禍而成名夫豈偶然哉

刑曹駁財 左丞免謫

議罪 沈存中內翰云刑州有盜殺一家其夫婦即時死有一子明日乃死州司以其家財產依戶絕法給出嫁親女刑曹駁曰某家父母死時其子尚在財產乃子物所謂出嫁女即出嫁姊妹不合有分見筆談

鄭克曰壽州之斷失在不原情理也邢州之斷失在不正名分也俗吏用法大率多然法何咎耶

議罪 宋文帝時制劫盜同籍期親補兵餘胡切縣杭人薄道舉為劫從弟代公道生並大功親

(17才)

或以代公等母存為期親而謂子宜隨母補兵尚書左丞何承天議曰婦人有三從夫死從子今道舉為劫叔父已沒代公道生並是從弟不合補謫音摘責乃以叔母為期親而令二子隨母既乖大功不謫之制又失婦人三從之道謂其母子並宜見原出南史本傳鄭克曰夫不辨男女之異而謫婦人補兵豈非不正名分不原情理之甚者歟此俗吏守文之弊不可不知也

從事函首 乖崖察額

迹賊 近代有人因行商回見其妻為人所殺而失釋冤 其首以告妻族乃執其婿誣以殺女送官吏

(17ウ)

嚴訊之乃自誣伏案具郡守委諸從事從事疑之請緩其獄更加窮治太守聽許乃追封內件作行人徧供近日與人家安厝墓冢多少去處一面詰之又問頗有舉事可疑者乎有一人曰某近於豪家舉事只言死却孀子五更初於墻頭昇過凶器輕似無物見瘞某處函遣人發之但獲一女人首即將對尸令其夫驗認云非妻也繼收豪家鞫之乃是殺一孀子函音威首葬之以尸易此良家婦私蓄之豪民棄市婿乃獲免此五代時事玉見

話閑

鄭克曰頃聞太平州有一婦人與小郎偕出遇雨入古廟避之見數人先在其中小

(18才)

(18ウ)

(19才)

郎被酒因睡至晚方醒人皆去矣嫂已被殺而尸無首驚駭號呼被執送官不勝拷掠誣服強姦嫂不從而殺之棄其首與刀於江中遂坐死後其夫至廬陵於優戲場認得其妻諸伶悉竄捕獲伏法蓋向者無首之尸乃先在廟中之人也伶人斷其首易此婦人衣而携去小郎之冤如此然則曠證未明獄可遽決乎○宣歙間有強盜「夜殺一行旅棄尸道上携其首去將曉一人繼至而踐其血亟走避之尋被迫捕繫獄半年不決有司切欲得首結案乃嚴督里胥遍行搜會一丐者病臥室中即斬以應命囚亦久厭拷掠遂伏誅後半年強盜始敗于真州獄成驗所斬首乃瘞于歙縣界彼里胥之濫殺與平民之枉死皆緣有司急於得首以結案也然則追責贓證可不審謹乎此皆政和中事可為典獄之戒

(19 ㄣ)

### 察賊

張詠尚書知江寧府有僧陳牒出憑公據案「熟視久之判送司理院勘殺人賊那傑下曉其故公乃召僧問披剃幾年對曰七年又曰何故額有繫巾痕即惶怖首伏乃一民與僧同行道中殺之取其衲部戒牒自剃為僧也

見李耿所撰忠定公語錄

鄭克曰按善察賊者必有以識之使不能欺也善鞠情者必有以證之使不可諱也

(20 才)

詠實兼此二術矣可不謂之明乎

### 察盜

無名破冢 行成叱驢

唐天后賜太平公主鈿音田金華飾器金寶歲餘

(20 ㄣ)

失之后聞之怒督洛州長史而下捕盜甚急

吏卒游徼音叫斥候計無所出道逢湖州別

駕蘇無名相與請至縣白尉曰得盜矣尉問

之無名曰吾湖州別駕也尉問吏卒何得誣

辱無名曰君無怪也吾歷官所在擒奸擿伏

有名此輩聞之故見誣庶解圍耳遂請見長

史使聞于朝天后召見無名對曰請寬府縣

盡以捕盜吏卒付臣不過數日決為陛下獲

盜天后許之無名戒吏卒於東北門伺察有

胡人十餘輩衣衰音崔喪服也經音迭出赴北邙

莫郎切洛即踵以報果見諸胡人至一新冢

設奠哭而不哀既徹奠又巡行家傍相視而

笑無名乃使擒之而發其冢剖棺視之寶器

在焉天后問何術獲盜因對曰臣無他術但

識盜耳臣到都日正見此胡出葬便知是盜

但未知葬處今清明拜掃計須出城尋逐蹤

跡可以得之哭而不哀者所葬非人也巡家

而笑者喜物無傷也向若陛下迫促府縣此

賊計急必取而逃矣天后稱善遷秩二等

### 察盜

唐懷州河內縣董行成善察盜有人從河陽「長店盜行人一驢并囊袋天欲曉至懷州行成市中見之叱曰彼賊住盜下驢即承伏少

(21 ㄣ)

(21 才)

頃驢主尋蹤至或問何以知之曰此驢行急而汗非長行人也見人即引驢遠過怯也是故知其為盜也

鄭克曰按蘇與董非聞人也特以察盜尺寸之長著于舊集傳於今世使不泯沒亦足觀能也

王曾驗稅 司空省視也 息井切 書

證憑

丞相王曾少時謁郡僚有爭負郭田者封畛音軫田間 既泯質劑遵為切券書也 且亡未能斷決

曾謂驗其稅籍曲直可判郡將從之其人乃

服見沂公言行錄

鄭克曰按界至不明故起爭訟契書不存

故難斷決唯有稅籍可為證據辭與籍同

者其理直也辭與籍異者其理曲也曲直

既判焉得不服大觀間曾諤逆各朝議知切

越州諸暨縣四明富民初唯一子後通其

僕之妻又生一子而收養之年十六富民

之子與母謀以還其僕後數年所生母與

嫡母皆死乃歸持服且訟分財累年不決

監司委諤推治歷訊不能屈因索本邑戶

版驗其丁齒而富民嘗以幼子注籍遂許

其分此亦以籍為證者也爭田之訟稅籍

可以為證分財之訟丁籍可以為證雖隱

隱而健訟者亦聳懼而屈服矣此證憑之

術所以可貴也

嚴明

前漢時沛郡有富家翁貲二十餘萬有一男纔三歲失其母別無親屬一女不賢翁病因

思恐爭其財兒必不全遂呼族人為遺書悉

以財屬女但遺一劔云兒年十五以此付之

其後亦不與兒兒詣郡訴太守司空何武因

錄女及婿省息井切視也 察也 其手書顧謂掾吏曰

女既強梁婿復貪鄙畏賊害其兒又計小兒

正得此財不能全護故且付女與婿內實寄

之耳夫劔者所以決斷限年十五者度其子

智力足以自居女婿必不還其劔當聞州縣

或能明證得以伸理此凡庸何思慮深遠如

是哉悉奪其財與兒曰弊女惡婿温飽十年

亦已幸矣聞者歎服出風俗通

鄭克曰按張詠尚書知杭州先有富民病

將死子方三歲乃命婿主其貲而與婿遺

書云他日欲分財即以十之三與子七與

婿子時長立以財為訟婿持書詣府請如

元約詠閱之以酒醑地曰汝之婦翁智人

也時以子幼故以此囑汝不然而子死汝手

矣乃命以其財三分與婿七分與子皆泣

謝而去此正類何武事也夫所謂嚴明者

謹持法理深察人情也悉奪與兒此之謂

法理三分與婿此之謂人情武以嚴斷者

婿不如約與兒劔也詠以明斷者婿請如

約與兒財也雖小異而大同是皆嚴明之

(22 才)

(22 才)

(23 才)

(23 才)

(24 才)

政也

韋臬劾<sub>人</sub>則切推窮罪財 趙和贖產

覈奸

唐韋臬鎮劍南日有逆旅停止大賈貨貨萬

計因病而斃之隱沒其財因以致富公知之

又有北客蘇延商販於蜀得病而卒以報於

公公使驗其簿籍已被店主易換公乃尋究

經過密勸於里屬詞多不同遂劾店主與同

店者立承欺隱凡數千緡音曼錢與吏二十

餘人分張悉命赴法由是劍南無橫死之客

鄭克曰按陳執方大卿知州時漢上舟

子數溺商旅取貨財輒以險為辭執方據

案悉寘于法因取近灘數家除其徭役使

表水險涉者因此得不橫死與臬覈姦之

術頗同也

唐咸通初趙和為江陰令以折獄著聲有楚

之淮陰二農比莊通家其東鄰以莊券質西

鄰錢百萬緡後當取贖先納八千緡期來日

以殘資贖券恃契不徵領約明日再賚餘緡

擊兩切錢貫也至而西鄰不認既無保證又無文籍

訴于州縣皆不能直乃越江訴于江陰和曰

縣政甚卑且復踰境何計奉雪東鄰泣曰至

此不得理則無處伸訴矣和乃思策一日召

捕盜吏數輩齎至淮陰云有寇江賊案劾

已具言有同惡相濟者在某處居名姓形狀

俱以西鄰指之請枯音枯送至此先是

(24ウ)

鄰州條法唯持刃截江無得藏匿既至和責

之曰何為寇江因泣曰田夫未嘗舟楫和曰

所盜多金寶錦絲非農家所宜有汝宜自籍

以辨之囚意稍開乃言稻若干斛莊人某人

者袖絹若干匹家機所出者錢若干緡東隣

贖契者和乃曰汝果非寇江者何為譁東鄰

所贖八千緡遂引其人使之對證慙懼服罪

於是枯往本土檢付契書卒寘之法

鄭克曰按和所用之術蓋亦本於張允濟

也近時小說載侯臨侍郎為東陽令時他

邑有民因分財產寄物姻家遂被隱匿屢

訴弗直聞臨治聲來求伸理臨曰吾與汝

異封法難以治止令具物之名件而去後

半年縣獲強盜因縱令妄通有贓物寄某

家乃捕至下獄引問泣訴盜所通金帛皆

親黨所寄臨即遣人追民識認盡以還之

此乃用和鈞愿之術者雖巧捷不逮而沈

密過之譬猶持重之將不苟出於奇亦必

依於正以此用譎則無敗事尤可貴也

柳設榜牒 陳具飲饌

後周柳慶字更與領雍州別駕有胡家被劫

郡縣按察莫知賊所鄰人被囚者衆慶以賊

是烏合可以詐求之乃作匿名書多榜官府

門曰我等共劫胡家徒侶混雜終恐泄露今

(26ウ)

(26才)

(25ウ)

慶乃復施免罪之牒居二日廣陵王欣家奴  
面縛自告牒下因盡獲黨與甚衆出北史柳  
虬傳慶其

### 鞠情

也

弟

吳陳表字文興以父死敵場擢用為將時有  
盜官物者數人唯取施明拷掠明素狀悍俟  
死無詞廷尉以疑聞孫權以表得士卒心詔  
以明付表使自以意求其情實表乃去其桎  
音實械足日極 梏飲食沐浴之以誘其歡心明乃

首伏具列支黨表以狀聞權悅之欲全其名  
特釋明而戮其黨明感表變行遂成健將致  
位將軍出吳志陳武  
傳表其子也

鄭克曰按梁傳岐為新安郡始新令縣人  
有因鬪毆而死者死家訴郡郡錄其仇人  
考掠備至終不引咎乃移獄于縣岐即令  
脫械以和言問之囚便首伏此亦歡以誘  
之者也

### 朱詰賊民 孔察代盜

### 覈奸

朱壽昌中散知閩州有大姓雍子良屢殺人  
挾財與勢故得不死時又殺人乃隸其里民  
使出就吏獄具壽昌疑之因引囚屏處訊之  
囚對如初乃告之曰爾以死代人母令有悔  
吾聞子良遺汝錢十萬納汝女為子婦許嫁  
其女汝家有之乎囚色動又告之曰汝且死  
書券抑汝女為婢指十萬為備直而嫁其女  
於他人汝將奈何囚悟泣下始以實告子良

付法一郡以為神明見曾肇所撰墓誌

鄭克曰按大理評事侯詠為隰州錄事參

軍時土豪趙寶者殺人誣其備令代死且

賊吏成其獄詠辨狀立正之與子良事頗

相類也一隸獄吏使以備代一隸里民使

以身代其為姦等耳詠能辨獄吏受賕之

挾而正其罪壽昌能探里民受賕之情而

得其實是皆善覈姦者也

### 釋冤

後唐孔循以邦計貳職權領夷門軍府事長  
垣縣有四鉅盜富有資產及敗所牽挽則四  
貧民也蓋都虞候姓韓者則密使郭崇韜之  
僚婿與推吏獄典同謀鍛都玩切  
鍛鍊也成此獄都

不訊鞫疑成而上法當棄市循親慮之囚無

一言領過蕭牆囚屢回首公疑其情未究因

召問之云實枉且言適以獄吏高其枷尾故

不得言請退左右細述其事即令移於州獄

俾郡主簿鞫之自韓已下受賂者數十人與

四盜俱伏法四貧民乃獲雪此和嶽所聞  
五代時事

鄭克曰按巡捕之吏或縱盜而捕繫平民

以應命或失盜而捕繫平民以逃責或求

盜而捕繫平民以希賞若獄吏與之為市

則冤濫豈可勝言此在聽者察之耳孔循

所察乃縱盜而捕繫平民以應命者也又

有失盜而捕繫平民以逃責者二事求盜

而捕繫平民以希賞者一事○范正辭郎

(27 才)

(27 才)

(28 才)

(28 才)

(29 才)

中為江南轉運副使時饒州有羣盜劫富  
民家財捕得十四人獄具當死正辭按部  
至饒引問察其非實命徒他所訊鞫既而  
民有告羣盜所在者令監軍王愿掩捕愿  
未行而盜遁去正辭親出郭追獲之皆伏  
法而十四人得釋○趙稹音診少師為益州  
路轉運使時邛音蠶州蒲江縣捕劫盜  
不得而官司反繫平民數十人楚掠強服

(29ウ)

且合其辭若無可疑者積適行部意其有  
寃乃馳入縣獄盡得其寃狀釋之已上二見  
本薛向樞密提點河北刑獄時深州武強  
縣有盜殺人而奪其財尉以失盜為負捕  
平人掠服之置贓於外以符其語向得而  
疑之親引問直其免死者六人正其尉故  
入之罪見品大防所撰墓誌此三者皆與孔循慮囚  
事類矣非有他術但盡心察情故能釋寃  
也

崇龜認刀 司馬視鞘

迹賊 唐劉崇龜鎮南海有富商子年少而暫切例  
釋寃 也又音錫 白泊船江岸見一高門中有美姬  
人色白也 殊不避人少年因戲語之曰夜當詣宅矣亦

無難色是夕果啓扉待之少年未至忽有盜  
入其室欲行竊姬即不知欣然往就盜謂見  
擒以刀刺之遺刀逃去富商子繼至踐其血  
汰音澗滑也而仆地及捫音門手之乃見死

(30才)

迹賊 後魏司馬悅為豫州刺史有上蔡董毛奴齋  
釋寃 錢五千死於道或疑張堤行劫又於堤家得  
錢五千堤懼楚掠自誣言殺之悅疑之乃引  
毛奴兄問曰殺人取錢當時狼狽音貝狼應

有所遺曾得何物答曰得一刀鞘悅取視之  
曰非此里巷所為也乃召州內刀匠示之有  
郭門者言此刀鞘其手所作去歲賣與郭人  
董及祖悅收詰之具服出北史司馬楚

(30ウ)

者聞逗血聲未已走出船夜解維而通明日  
其家迹其蹤至岸岸上之人皆云其夜有某  
客船徑發遂訟于公府遣人追捕械繫訊  
具吐情實唯不招殺人崇龜視所遺刀乃屠  
刀也因下令曰某日大設合境屠者皆集毬  
場以候宰殺既而日晚放散令各留刀翌音  
也明日再至乃命以殺人刀換下一口明日  
諸人各來請刀獨一屠最後不認己刀因詰  
之對曰此非某刀問是誰者云乃是某人之  
刀耳亟往捕之則已竄矣於是因合死  
者為商人子侵夜斃音弊之竄者聞而還乃  
擒實于法富商子坐夜入人家杖背而已新見  
唐書劉政會傳崇  
龜其七世孫也

(31才)

鄭克曰按凡欲釋寃必須有術換刀者迹  
賊之術也斃囚者誦賊之術也賊若不獲  
寃何由釋故仁術有在於是者君子迹不  
可忽也

(31ウ)

鄭克曰按悅所以能使及祖服罪者雖有

智筭亦偶然耳向若賊不遺刀鞘或鞘非

州內刀匠所作何從知及祖為賊耶其可

稱者哀矜審謹合於中孚獄緩死之義

故卒能獲賊以釋寃也

張鸞音泥搜鞍 濟美鈎篋

### 迹盜

唐張鸞字文成為河陽尉有客驢韁斷并鞍  
失之三日訪不獲詣縣告鸞推窮甚急盜乃

夜放驢出而藏其鞍鸞曰此可知也遂令不

秣音末食 飼驢去轡夜放之驢尋向昨夜餓

處去及搜索其家於積草下得之人服其智

鄭克曰按管仲之相齊侯也伐山戎還而

迷失道仲令解縱老馬軍隨以行乃得之

鸞蓋采用此術也夫故道有跡可求而人

莫能識彼皆識故道者則宜假以求之矣

是亦君子善假於物之義也顧憲之任牛

索主亦以此歎

### 察盜

唐閻濟美鎮江南有舟入傭載商賈人貨甚

繁碎其間有銀一十錠密隱之於貨中舟人

潛窺之伺其上岸乃盜之沈於泊船之所船

夜發至於鎮所點閱餘貨乃失其銀遂執舟

人以見公公曰客載之家盜物皆然也問曰

客昨者宿何所曰此去百里浦漢中公令武

士與船夫同往索之公密謂武士曰必是船

人盜之沈於江中矣爾可令楫師沈鈎取之

其物必在若獲之必受吾重賞武士乃依公

命鈎而引之銀在篋中封署猶全而獻于公

公劾之舟者立承伏法

鄭克曰按治民之官每患奸盜敢為其敵

善料事者譬猶用兵善料敵也濟美所以

知舟人盜銀沈于江中者此耳是亦可稱

也

(32才)

### 議罪

承天議射 廷尉訊獵

宋劉毅鎮姑熟何承天為行軍參軍毅嘗出

行而鄆陵縣吏陳滿射鳥箭誤中直帥雖不

傷處法棄市承天議曰獄貴情斷疑則從輕

昔有驚漢文帝乘輿馬者張釋之劾以犯蹕

音必警蹕也 罪止罰金明其無心於驚馬也

故不以乘輿之重加以異制今滿意在射鳥

非有心於中人也律過誤傷人三歲刑況不

傷乎罰之可也出南史本傳

鄭克曰按此亦推己議物捨狀探情者也

魏高柔為廷尉時獵法甚峻宜陽典農劉龜

竊於禁內射兔其功曹張京詣校事言之帝

匿京名收龜付獄柔表請告者名帝大怒曰

劉龜當死乃敢獵吾禁地送龜廷尉便當拷

掠何復請告者主名吾豈妄收龜耶柔曰延

尉天下之平也安得以至尊喜怒而毀法乎

復為奏辭旨深切帝意悟乃下京名即還

訊之各當其罪出魏志本傳

(33才)

承天議射 廷尉訊獵

(33才)

(32才)

### 議罪

(34才)



鄭克曰按法有誣告反拷告人所以息奸  
省訟也安得匿告者名乎柔可謂能執法  
矣後魏游肇為廷尉時宣武嘗勅肇有所  
降恕執而不從曰陛下自能恕之豈可令  
臣曲筆此亦柔之流亞歟惟柔與肇皆詔  
所指以勵士師者故並著焉庶幾執法之  
吏不曲筆以縱有罪不毀法以陷無辜而  
處議合於人心也 棠陰比事卷下終

(34ウ)

棠陰比事目錄終

無名破冢	行成叱驢
王魯驗稅	司空省書
韋鼎劾財	趙和贖產
柳設榜牒	陳具飲饌
朱詰賊民	孔察代盜
崇龜認刀	司馬視鞘
張鷟搜鞍	濟美釣篋
承天議射	廷尉訊獺

釋冤

棠陰比事卷上  
向相訪賊 錢推求奴

向敬中丞相判西京有僧募過村舍求宿主人不許求寢於門外車箱中許之是夜有盜入其家携一婦人并囊衣踰牆而出僧不寐適見之自念不為主人所納而強求宿明日必以此事疑我而執詣縣矣因亡去夜走荒草中忽墜臂骨於井而踰牆婦人已為人所殺尸在井中血汚僧衣主人蹤跡捕獲送官不堪掠治遂自認云與婦人奸誘以

口繪9 「棠陰比事」目錄末尾・本文第1丁才

復為奏辭旨深切常意悟乃下京名即還訊之各當其罪 此雜志本傳  
鄭克曰按法有誣告及拷告人所息奸省訟也安得匿告者名乎柔曰謂能執法矣後翹游聲為廷尉時宣武嘗勅聲有所降怒執而不從曰陛下自能怒之豈可令臣曲筆此亦柔之流亞歟惟柔與聲皆詔所指以勵士師者故並著焉庶幾執法之吏不曲筆以縱有罪不毀法以陷無辜而慶議合於人心也 棠陰比事卷下

口繪10 「棠陰比事」最終丁ウ・裏見返